

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

特集：日本の中の外国



特集

日本の中の外国

目次

もう一つの日本の創造を 南善巳〔全国市町村国際文化研修所所長〕	4
スウェーデン国王が交流の足掛かりに 北海道当別町・柳沼忠	8
米ミネソタ州立大学秋田校を誘致 秋田県雄和町・鈴木力雄	10
作品に登場でシェイクスピア公園整備 千葉県丸山町・小宮貞夫	12
古くから日ソ交流の玄関口に 新潟市・近藤淳一	14
ブラジル人、外国人登録者の六割に 静岡県浜松市・嘉村良子	16
官民挙げてトルコと交流活動 和歌山県串本町・田嶋勝正	18
夏場の仕事着は官民ともにアロハシャツ 鳥取県羽合町・秋久敏彦	20
ジョン万スピリットでトライアングル交流 高知県土佐清水市・植杉英輔	28
マイセンの森、有田通りを友好の証に 佐賀県有田町・多久島道彦	30
サービス産業としての県庁経営 福田昭夫〔栃木県知事〕	3
●コラム	
百年の計 花岡洋文〔茨城県企画部長〕	22
「旧町村」復権のススメ 荒田英知〔P・H・P総合研究所主任研究員〕	27
●地方財政関係施設解説	
地域国際化推進施策について 総務省自治行政局国際室	32
●トピックス	
元寇720年記念イベントを実施 長崎県芦辺町・西村善明	35
全国初の「教育の日」を制定 和歌山県貴志川町・矢田知大	37
体で自然を感じ、地球を考えよう 新潟県上越市・増田昌由	38
全国でも珍しいスケボー施設 高知市・片岡正臣	44
連携・交流プログラム策定調査 国土庁	36
●地域づくり団体探訪	
こつみ塾 長野県小海町	40
●地域を支える女性パワー	
たんぼほの会 島根県六日市町	42
地域だより／センター通信	45・46
●グラフィック	
日本の中の外国	1・23
都道府県漫遊／手前みそですが	47・48

表紙●村上の大祭
(新潟県村上市)

新潟県下三太祭りの一つ、村上大祭が七月六、七の両日行われた。江戸時代初期に市内の羽黒神社が遷宮したときに始まり、約三百五十年の歴史を持つ県の無形民俗文化財。



三基のみこしに神霊を奉じて巡行する「お旅神事」。庄巻は雄朱や金ばくで飾られた「おしやぎり」と呼ばれる勇壮な山車で、十八台が参加。笛やかね、甚句に合わせて市内を練り歩いた。中には二百年以上も前に作られたしやぎりもあり、城下町は六万人を超す市民、観光客で熱気に包まれた。「しやぎりには昔は男の子だけが乗ってかねをたたいたり、つづみを打っていたが、最近では少子化のせいか女の子も増えている」（美濃貞二市商工観光課長）という。

また日本最初の鮭の博物館「イヨボヤ会館」が鮭公園内にある。●ペンやなぎ●カメラ●小形又男



E 系ブラジル人のまち＝静岡県浜松市
クリスマスには、外国人と市民が一体となってサンバや阿波踊りに興じる。



S スウェーデンの夏至祭＝北海道当別町
毎年6月の夏至に一番近い週末に、スウェーデンの伝統行事「夏至祭」が行われる。今年で18回目

ジョン万次郎＝高知県土佐清水市

米国への日本人留学生第一号、ジョン万次郎の故里では、交流先の少年たちと野球大会で親善を図っている



日本の
外国

わが国には、外国の人物、地域、施設などの名前を使用してまちづくりや国際交流を行っている自治体がある。貿易摩擦解消の一環として、米大学の日本校を誘致したり、遭難した使節団を捜索、救

助したのが縁となったケース。帰任する大使に国王自らが働き掛けたり、ときかけはいろいろだ。グローバル化が叫ばれる中、地域住民と一体となって積極的に取り組んでいる事例を紹介したい。



シェイクスピア公園＝千葉県丸山町
町の特産品、ローズマリーがシェイクスピアの作品に多く登場することから、公園を建設



米ミネソタ州立大日本校＝秋田県雄和町
ミネソタ州立秋田校キャンパスで行われるハロウィン・フェスティバルは地元の児童たちで大盛況



ママイセンの森＝佐賀県有田町
町にマイセンの森を建設。姉妹都市二十周年を記念してさまざまなイベントを開催。「踊るボーセリンの子供たち」の公演



アアロハのまち＝鳥取県羽合町
町名が「ハワイ」のため、米ハワイに似たまちづくりを。夏場に役場職員がアロハシャツを着て執務したことから民間企業でも採用



ロシアの玄関口＝新潟市
今年初めての「ロシア文化に親しむ日」では、サモワールを使ってロシアのお茶の飲み方を紹介

トルコ文化＝和歌山県串本町
トルコ訪日使節団救助が縁での友好110年・洋上追悼式典。三笠宮寛仁殿下、駐日トルコ大使ら





福田昭夫
栃木県知事

サービス産業としての県庁経営

新しい一歩を踏み出した二十一世紀初頭は、少子高齢化による人口構造の大きな変化、地球規模での環境との共生、経済のグローバル化やIT革命の急速な進展など、社会経済構造がダイナミックに変貌を遂げていくことが予測されております。私は、この新しい世紀に知事として、二百万人の県民とともにこれからの「とちぎづくり」に貢献できる喜びとその責任の大きさを実感しております。

この新しい世紀において、「活力と美しさに満ちた郷土」とちぎ」を築き上げることを目指して、栃木県総合計画「とちぎ二十一世紀プラン」を策定し、この四月からスタートさせました。この計画は、新世紀の課題に積極的に対応するための「とちぎ二十一世紀プロジェクト」を掲げるとともに、五つの基本目標に基づき、平成十七年度までの具体的な取り組みを明らかにしたものであります。

私は、この計画を推進させるうえで、「まちづくり、ひとづくり」については、私たちの郷土「栃木県」に、大きな足跡を残された二宮尊徳翁の考えが非常に役に立つと考えております。尊徳翁はまず、「まちづくり」については、「人間は一生懸命働いて、小さなことをこつこつと積み重ねていかないと大きなことはできない。そのためには他人を愛して一生懸命自分で奉仕できるところを奉仕し、共同一致していかなければ良いまちづくりはできない」といった意味のことを語っています。また「ひとづくり」については、「一生懸命働いて、自分の分度を決めて自立すれば、必ず豊かになれる。豊かになったら譲るこ

とを考え、最後まで道義ある人間として生きなさい」と言っています。尊徳翁が目指した自己責任、自己決定は、これからの地方分権の時代にまさに求められる時代が変わっても変わらない考え方であり、この尊徳翁の精神を現代に受け継いで、「魅力あるまちづくり、ひとづくり」に生かしていきたいと考えております。

また、県庁は県内最大のサービス産業であるとの認識に立って、私は、顧客である県民の皆さまが高い満足度を得られる行政サービスを提供するために、県政に「経営」という理念を取り入れ、その基本となる七つの「経営方針」を立てました。すなわち、「情報公開の徹底」「開かれた県庁の構築」「市町村重視の県政の推進」「NP・民間活力の導入」「県民参加による自主性の高い県政の推進」「総合的な計画行政の推進」「不断の行政改革の推進」であり、これらの経営方針の下で、県職員すべてが最良の行政サービスに向けて、高い意識をもって県政を進めてほしいと考えております。また、本県独自の政策経営手法である「とちぎ政策マネジメントシステム」を導入し、二十一世紀にふさわしい県民本位の効率的で質の高い県政を推進していきたいと考えております。

こうした取り組みを、すべての栃木県民の皆さまとのパートナーシップの基に推進し、二十一世紀プランに掲げた「活力と美しさに満ちた郷土」とちぎ」の実現を「とちぎ」から創る二十一世紀の日本」という気概を持って目指してまいります。

もう一つの日本の創造を

国内外で一体化した基準で



南 善己

全国市町村国際文化
研修所所長

われわれの周りには外国あるいは外国的なものがはらんしているといわれるが、読者は次に記述するものを見たとき、外国あるいは外国的なものとして認識するだろうか。もしするとしたらどのようなものとしてとらえるだろうか。

ベンツ・車（ドイツ）、グッチ・バッグ（イタリア）、オメガ・時計（スイス）のような商品、あなたの街中を歩くALIT（JET事業の英語助手）、ブッシュ米国大統領、ネパール新国王のような外国人、グラント・キヤニオン（米国国立公園）、万里の長城（中国）、ローマ・コロシウム（イタリア）の有名な名所旧跡、マクドナルド（米国ハンバー

ガー）、トイザラス（米国玩具）、メリルリンチ（米国証券）のような外資系会社。

われわれは現在、実にいろいろな形、形態で直接あるいはTV、映画などの情報媒体を通じて外国あるいは外国的なものを日常的に見聞しているかが分かる。

3つのとらえ方

話は少々理屈っぽくなって恐縮だが、ものごとのとらえ方、認識の仕方を考えてみると、一つはその対象物を自分の外に存在するものとして客観的に見るとらえ方がある。先に記述した外国の人物、景色、会社などは多くの人がとっては、自分の外に存在するもの

だろう。ただ、自分の家族がその会社で働いていたり、自分がその場所を観光したり、自分の愛車である場合などは、その存在を必ずしも客観的に突き放して見ることはできないだろう。

もう一つはその外国の対象物を見るのではなく、見せつけられる場合がある。戦争、内乱、動乱、戦場、略奪、領海侵犯、空爆、艦艇射撃などはこれに該当するだろう。また、ものを敵対的に、反感的に考えている場合にそのものを見るときは見せられているという受身の感じが強いだろう。外資系会社でリストラされた人、外車で交通事故に遭った人などはその外国社名、ブランド名などを客観的に見る、あるいは聞くということとはできないだろう。

さらに、もう一つのものにとらえ方がある。それは、その対象物を自分の中に取り込む、あるいは自分と一体化、同一化、共有化して見る、とらえるというものだ。その対象物とのかかわりは、接触する、参加する、関与するといった表現のものから叫ぶ、話す、議論する、触る、置く、動かす、遊ぶ、作る、取る、撮る、壊す、直すなどのあらゆる行動によりそのかわり、関係が形成される。

「日本の中の外国」といった場合、その外国というものの存在は、われわれの外にあるものではなく、日本の「中」の外国であり、こ

これまでのものとのとらえ方の分類でいうと、この最後の同一化、一体化、共有化といったものになって初めて、日本の「中」でその「外国」は存在する。少し違ういい方をすると、それは日本のなかでの「もう一つの日本」といえるかもしれない。

イチローと新庄

今年になって、テレビのスポーツ・ニュースのトップやスポーツ新聞の一面が大きく変わったといわれる。従来だと、長嶋巨人軍の勝敗・動向なりその選手の活躍がトップを飾るのが一般的だったが、今年はイチロー、新庄選手などの米国メジャー・リーグの勝敗や活躍がまず紹介される。テレビのゴールデンタイムを占めていた巨人戦の視聴率の低迷が話題になるほどだ。今年イチロー、新庄がメジャー・リーグ入りしたが、それ以前に、野茂や伊良部がそれぞれ日本を離れ、米国で活躍したが、そのときと比較するとどこが違うのだろうか。それは、野茂、伊良部の場合は外国の出来事として客観的に外のこととして見ていたが、今回のイチロー、新庄のプレーは自分と一体化、共有化して見ているところにその違いがある。

米国の試合ではあるが、国内試合と同じ感覚でその区別がなく人びとは見ているのであり、その結果として日本の野球をそのイチロー

1、新庄のプレーなり米国での外国人の野球を見る基準またはその面白さの基準で見ている。それは、日本だけで独立して厳然として存在した基準というものがなくなり、日米同一となったということである（ただし、日本においてただだが）。これは、情報が国際化した結果、基準、ルールなどが国内外で一体化、統一化、共有化したことを示すものであると考えられる。

情報の交流

国際化という場合、人の交流、物の交流および情報の交流とよくいわれる。二十世紀、とくにその後半における科学技術の発展は、飛行機などの交通運搬手段の大型化、定型化、低廉化をもたらし、コンピュータなど情報通信手段の大量化、高速化、鮮明化を可能にした。この結果、非常に多くの人びとが名所旧跡の観光、スポーツ観戦・試合交流、学会出席・交換留学などの学術交流、国際博覧会などのイベント、投資・出資・買収などの視察・交渉のために外国に出かけることが容易となった。

また、物としては、鉄鋼、機械、車、石油、石炭、ウラン、コンピュータ、電気製品、衣料品、食料品、木材などをはじめ最近では野菜まで貿易の対象となっている。このように近年、人と物の交流はその幅がますます広が

るとともにその規模、量は深く、大きくなってきたが、従来、国際化で現実的に考えられてきたことは、この範囲までだったように思う。しかし、このような人、物の交流に加えてインターネット、Eメールの世界的かつ一般国民への急速な普及は、「情報の交流」というものを前面に押し出し、この結果われわれの社会の基準、ルールなどに影響を与え始めている。

5つの導入

ここで、ここ二三年の間にわが国あるいは地方団体が情報の国際化というものの影響を受けて導入を図ろうとしているものを見てみたいと思う。それは、外国の地域で行われている共助事例、外国機関の環境基準、外国の学者のデザイン発想、外国のスポーツの水準（メジャー・リーグ）、外国の地方団体の広報組織・活動、外国の会計基準（金融ビッグバン）、外国の税制（401K）などである。

1 地域通貨・エコマネー

（外国の地域で行われている共助事例）

地域通貨、エコマネーという言葉が社会福祉あるいは地域おこしのキーワードとして広がっている。この考え方は十九世紀の社会主義者にさかのぼるといわれているが、一九八〇年代になって米国ではイサカ（ニューヨーク

ク州)をはじめ三百以上の地域、カナダではトロント、バンクーバーなどで導入され、現在、世界中で二千六百以上のコミュニティで試みられているといわれている。

地域通貨の発行の仕方、使い方などは地域によって異なるが、わが国で地域通貨を導入した地域での名称は、滋賀県草津市の「おうみ」(一九九九年)、北海道栗山町の「クリン」(二〇〇〇年)、山梨県高根町など六町村の「福」(同)などだ。一つの例としては、自分が他人に行った介護、家事援助などのサービスを地域通貨単位(時間、点数など)で特定の団体で登録することにより、自分や自分の家族が介助が必要になったとき、その預託した地域通貨でそのサービスを受けるといいうものである。

2 ユニバーサル・デザイン

(外国の学者のデザイン発想)

障害の程度、部位や程度によりもたらされる障害を除去する対策としてのバリア・フリーを超えて、障害の有無、年齢、性別、国籍、人種などにかかわらず、多様な人びとが気持ちよく使えるようあらかじめ都市や生活環境を計画する考え方としてユニバーサル・デザインを提唱したのは米国人ノース・カロライナ州立大学教授のナルド・メイイス氏。米国においては一九九〇年米国連邦法(American with Disability Act)としてその考え方は実

現した。

分かりやすいサイン・看板表示、段差のないアプローチ、高さの異なる券売機、手に障害のある人でもつかみやすいハサミ・筆記具などは既にわれわれが身の回りで目にする。しかし、ここ数年、静岡県、高知県などにおいて都市再開発、まちづくりの視点から公共交通機関、公園、道路、駅など公共施設、住宅などのデザインにこのユニバーサル・デザインを採用して設計することが行われており、いろいろな駅、水族館、博物館、公園などで実現してきている。

3 ISO14001

(外国機関の基準)

事業主体として環境保全をどのような目標を立てどのように管理するかについては、いろいろな基準、手法があるが、一九九六年スイスにある国際標準化機構(ISO)が発行した環境マネジメントシステム14001を取得する地方公共団体が急増している。

ISO(フィルムのISO100、200を思い出して欲しい)は、企業の製品、サービスの品質保証の原則と実施の手順の基本的要素を国際的に統一化することを目的として設立され、そのシステムの考え方は、品質保証の信頼はその公平性、透明性に加えてその品質を一定の要求水準に保つ仕組みが維持されていること(手順の標準化による作業の効

率化、責任、権限の明確化、従業員の研修による技術水準向上、モラルハザードの回避など)によって確立するというものである。千葉県白井町、新潟県上越市が一九九八年わが国で初めて取得後、現在までに二百を超える地方公共団体が取得している。

4 フィルム・コミッション

(外国の地方団体の広報活動・組織)

映画、CM、ビデオ、写真などのロケーション撮影に際して便宜を図る非営利団体あるいは行政機能としてフィルム・コミッションがわが国で取り上げられたのは、わずか二年



滋賀県・ミシガン州など4者による国際交流研修プログラム「ジャパン・アドベンチャー・プログラム」による研修生

前だが、現在インターネットでこの言葉を検索すると三百項目がヒットする。この組織は、米国で一九四〇年代から撮影協力の窓口をハワイエー・パトリックなどが設置したことがその始まりといわれているが、現在では二十五カ国二百七十五組織に広がっている。

昨年、大阪、神戸、北九州、横浜に設立されて以来、その設置は急増している。十年前、CLAIRニューヨーク事務所勤務していた宮城県職員をニューメキシコ州政府に三カ月研修に出したが、その職員の勤務セクションの一つがこのフィルム・コミッション。どのような仕事をしているかと州政府職員に質問したところ、「宮沢りえのサンタフェの写真集のロケ地の面倒をみた」といい、各州にこのような組織があるということを説明してくれたことを思い出す。

5 インターンシップ

（外国大学生のインターンシップ）

最近、大学生に対するインターンシップを行う国内企業、役所が増加している。大学生にとっては社会勉強の機会であること、企業にとっては採用する学生の適性を見ることができるとなどがうまくかみ合っていると考えられるが、米国においては長い歴史を持つとともに幅広く社会的に受け入れられており、企業におけるインターンシップそれ自体を大学の単位として認めるところがある。

米国の州との姉妹州プログラムを活用して、その州内の大学と提携して日本でのプログラムをつくり、その米国人学生に日本企業でのインターンシップをさせる機会を与えながら単位を与えるという実例である。滋賀県、米国ミシガン州、琵琶湖汽船株、ランシング・コミュニティ・カレッジの国際交流研修プログラムがそれだ。



北海道北竜町のひまわり畑

定着の重要性

最近における情報交流を通じて「日本の中国の外国」に関する動きを述べてきたが、そのポイントには外国をそのまま見せるのではなく、また、外存在と置くのではなく、日本に定着させることにある。われわれの知らない外国、外国的なものはいくらでもある。今現在、日本に、あなたの町、村に関係なくとも、来年は関係を持てるチャンスがある。その関係を見いだすポイントは何だろうか。日本の中の外国の導入、定着に関して最近見つけて感動したものを紹介して終わりにしたいと思う。

それは、北海道北竜町の「ひまわり」。百鈴に及ぶひまわり畑、その加工製品、イベントなどには有名だ。そのきっかけは町の農協職員の旧ユーゴスラビアの飛行場に着陸するときに見た「ひまわり」の感動であり、成功に導いたのはそれをふるさとの里づくり、土づくりに生かした町当局をはじめとする住民、中学生などの一体化だ。きれいな美しい花を外国で見た日本人は観光旅行であろうと視察旅行であろうと数え切れないと思うが、それが自分のまちづくりに生きているのは、それを見て実感した人の鋭い感受性とそれを受けて粘り強く住民を説得し、組織化する行政当局の情熱がすべてである。それは、もう「外国」ではなくもう一つの「日本」の創造なのだ。

スウェーデン国王が交流の足掛かりに 都倉元大使の来町で奏功



柳沼 忠 当別町企画課主査

似ていた街並み

当別町は北海道第一の都市である札幌市に隣接した人口約二万人の町である。基幹産業は農業で、以前は稲作を中心としていたが、近年は花き栽培にも力を入れており、出荷量は北海道でも有数の町になっている。

昭和五十三年、都倉栄二・元スウェーデン大使が町内のゴルフ場に来られた折、「町の景観がストックホルムの郊外の街並みに非常によく似ている」と感想を述べられた。都倉氏はスウェーデンから帰任の際、国王よりスウェーデンと日本との交流の足掛かりが欲しいと依頼されていた経緯もあり、気候、風土のよく似たこの場所に交流拠点を建設してはどうかと提案された。

これに合わせ五十四年二月、北洋交易(株)グリーントウン事業部が「スウェーデン村計画」を発表し、十一月には当別町が「スウェーデン・北海道産業文化提携会議」の席上、スウェーデン村の誘致を表明した。現地の資材を

使って建てた住宅街スウェーデン

村には現在百八十世帯が入居している。一方、

五十五年十月には、スウェーデン交流センター発起人会が発足し、六十一年に現在の地に交流拠点施設としての「スウェーデン交流センター」がオープンした。

この間、駐日スウェーデン大使が来町し、スウェーデンへの招へいがあった。

スウェーデン村



交流協会の活動

六十二年十月、当別町長を団長とする使節団一行十五人が同国レクサンド市を訪問し、姉妹都市提携の調印をした。

当別町とレクサンド市が姉妹都市提携したのを契機に、当別・レクサンド都市交流協会が発足した。同協会は、両市町間における教育、文化、スポーツ、産業および経済などの交流を図るための諸事業を推進し、相互の友好親善に寄与することを目的として設立された。法人と個人を合わせると百七十以上の会員により組織されている。協会の主な事業としてレクサンド市の研修視察があるが、発足当初は町議会議員の研修視察団と同行し、その後は女性だけの訪問団や中学生を派遣するなど実りある人的交流を展開している。

昨春秋にはレクサンド市から高校生の訪問団を受け入れ、ホームステイによる町民レベルでの交流が促進された。町内の子供たちはスウェーデンの子供たちと直接接することに

より、文化の違いを感じ、また英語が単なる教科の一つではなく実際に話されている生きた言葉だということを痛感した。

今年中に、その刺激を受けた子供たちを直接海外に送り出して異文化を肌で感じてもらうと、町内の中学生十人をレクサンド市に派遣する予定だ。中には昨年、受け入れた子供たちも何人か参加し、スウェーデンでホームステイを体験しながら地元の人たちと交流する予定だ。当面、相互交流を行うことにより、その成果を少しでもお互いのまちづくりに役立てようと取り組んでいる。

全国に誇る「夏至祭」



当別町の第四次総合計画では、「異国文化が漂うまち」を基本構想に掲げている。その試みの一つとして、スウェーデン交流センターを核とした各種行事を実施している。その中でも毎年六月の夏至に一番近い週末に行われる、スウェーデンの伝統行事「夏至祭」がある。

当別町で開催される「夏至祭」も今年で十八回目を迎え、関係者各位の熱意ある取り組みにより、その内容・規模ともに最初のころとは比較にならないくらい充実してきた。また、この「夏至祭」を楽しみに来られる方々

も年々増え、六月二十四日に行われた今年の夏至祭には約七千人が参加した。弦楽四重奏によるクラシック音楽やスウェーデン民謡の演奏を行う「ミッドサマーコンサート」や「本場さながらのマイストング（夏至柱）を開く」などのフォークダンス「スウェーデンガラス製品などの展示即売会」など、趣向を凝らした盛りだくさんの催し物などで、スウェーデンの文化・風習に親しんでいた。国際化をテーマとしたイベントとしては、全国に誇れるものとして自負している。

世界の中の当別町

国際交流が叫ばれる中、本町も多くの体験を重ねてきたが、言葉などコミュニケーションの部分で伝達が苦手なことから、ついつい臆病になりがちだ。しかし、子供は相互に言葉が分からなくても友達になつてしまうこともよく知られている。

本当の意味での交流は、住民一人ひとりの意識の高揚にかかっている。本町がまちづくりのハード面でスウェーデン風の街並みを創出しようとする狙いもその点にある。

ほかとは違った個性、それを国際交流に向けて、テーマを持った街路「スウェーデン大通」、そして「スウェーデンプラザ」が整備されている。

子供たちがこのまちを歩き、ほかとは違っ

た雰囲気を感じるとき、国際化への一歩が始まっているかもしれない。

姉妹都市交流から端を発したまちづくりと交流事業は、これからもさまざまな経験



レクサンド市高校生とタ食づくりパーティー

を通して、より広く深いものになって住民の中に認識されるよう「世界の中の当別町」を実感できるまちづくりが、将来にわたっての大きな目標となっている。

米ミネソタ州立大学秋田校を誘致 国際化目指し町が全面協力



鈴木力雄 雄和町総務企画課課長待遇

日米首脳会談がきっかけ

秋田の空の玄関口雄和町は秋田市の南部に隣接し人口八千七百人、国際大学がある緑豊かな町である。

秋田空港に降りるとすぐ「国際田園都市 輝く緑と水の里 雄和」と英語で書かれた看板が待ち受けている。また、秋田市から雄和町に入ると「国際大学と国際空港のある町 国際田園都市 雄和」との看板が目につく。

雄和町は昭和五十六年、秋田空港の開港を契機に二十一世紀を展望したまちづくりを目指し、国際化・情報化をキーワードに秋田空港を生かしたまちづくり、秋田の空の玄関としての町の役割は何かを検討した。その結果、「国際社会に対応した人材育成」のため高等教育機関を誘致することになり、アメリカの大学日本校であるミネソタ州立大学秋田校の開学につながった。

アメリカ大学日本校誘致は、六十一年、当時の中曽根康弘首相とレーガン大統領との日

米首脳会談間で、貿易摩擦解消の方策として、将来を担う日米の青少年が互いに異文化を学ぶとともに、相互理解を深めるため、アメリカの大学の日本校設立が話題となったことが背景にある。

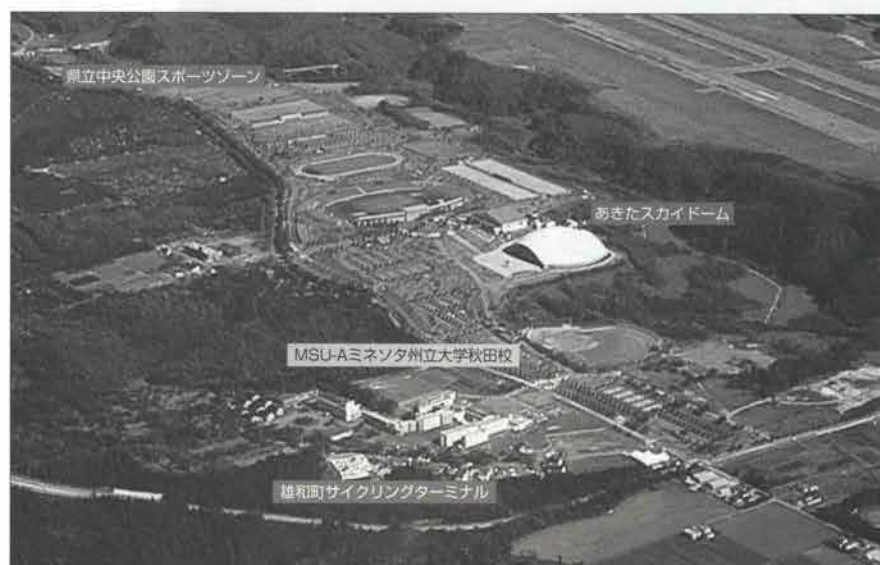
大学の事務局長は役場職員

町は大学誘致のため学校法人「秋田国際アカデミー」を設立、伊藤憲一町長自ら理事長に就任。大学のキャンパス敷地として五畝を無償譲渡したほか、校舎建設費の一部として六億円、運営費を毎年約六千万円補助、さらに事務局長、学務課長ポストには開学当初から役場職員が出向、町を挙げて協力している。

ミネソタ州立大学秋田校について、伊藤町長は「アメリカの大学誘致は秋田県はもとより雄和町にとっても画期的な出来事。国際化は時代の要請であり、秋田県内の高等教育機関が少なかったことから、雄和町として積極的に取り組んだ。建学精神は本当の意味での世界的に通用し活躍できる国際人の育成であ

り、その目的は着実に達成しつつある。また秋田の国際化という点で先導的な役割を果たした」と話す。

確かに、平成二年五月、ミネソタ州立大学秋田校の開校は、この町の国際化を一気に促進した。ピーク時は外国人登録者数が人口の二・一七%と高かった。その外国人はミ



県立中央公園スポーツゾーン

あきたスカイドーム

MSU-Aミネソタ州立大学秋田校

雄和町サイクリングターミナル

ネソタ州立大学秋田校の学生、教員とその家族がほとんどでアメリカ国籍であった。

ミネソタ州立大学秋田校開学以来、秋田とミネソタ州との交流は親密になり要人の来秋も多い。ケネディ大統領のもとで農務長官を務めたフリーマン氏、ミネソタ州知事、モンデール駐日アメリカ大使（元アメリカ副大統領）、ミネソタ州上院・下院議会両議長、ミネソタ州以外からは国連大学学長、日米教育委員会事務局長と幅広い。

英会話日本一を目指す

雄和町の国際化という点ではミネソタ州立大学秋田校の開校を契機にセント・クラウド市と姉妹都市提携し、これまで小学生・中学生が同市を訪問し現地中学校で授業交流を実施。六年にはミネソタ州で開催されたジャパンウィークに伝統芸能の披露、スポーツ交流に百二十人を派遣。五年にはセントジョンズ少年合唱団四十人を招き歌と和太鼓、民俗保存芸能の交流が行われた。また、英会話日本一を目指し、小学生から英語に親しみ国際感覚を身につけるため、ミネソタ州立大学秋田校開学とともに町内の四小学校で英会話のABC教室を授業の一環として開催している。

大学との地域交流

ミネソタ州立大学秋田校キャンパスに一步

足を踏み入れると、そこはもうアメリカ。白を基調とし、緑と調和した校舎はアメリカ文化を醸し、日本人学生・アメリカ人学生はその中で共に学んでいる。

現在の学生総数は二百四十五人（うちアメリカ人十六人）で、日本人学生の八〇％近くは県外出身者。秋田での地域行事に積極的に参加している。

カリキュラムには、地元の民俗芸能である「萱が沢番楽」や「田植え」体験があったり、隣接市町村の伝統行事「本荘市の裸祭り」「秋田市の竿灯祭り」「新能」へ参加する学生・教職員も多い。

ミネソタ州立大学秋田校開学以来開催しているハロウィーン・フェスティバルは子供たちから大人気で、スリラー感覚に趣向を凝らしたミステリーツアーやトリック・オア・トリート・ツアーには申し込みが殺到。ほかにコスチュームコンテストなどもあり親子で楽しめるスポットとして定着している。

日本語教育に関しては、夏休みの期間に全国のアリト（英語指導助手）を対象とした「夏期集中日本語講座」を六年前から開催している。初心者から日本語能力試験を目指す

方までを対象としたプログラムは、年々人気を博している。

JALIT（全国語学教員学会）秋田支部はミネソタ州立大学秋田校を拠点にして研究会を開催している。

雄和町が高等教育機関として誘致したミネソタ州立大学秋田校はミネソタ州立大学機構

と秋田県のパートナースhipによって新たな方向を目指そうとしている。

雄和町はこの高等教育機関とこれまではぐくんできた町民の国際的センスをさらに磨き、誇り得る文化の継承と未来を創造する人材育成と自然と融和した国際園都市を目指していききたい。



地元とのクリスマス交流会と伝統行事ナマハゲへの参加

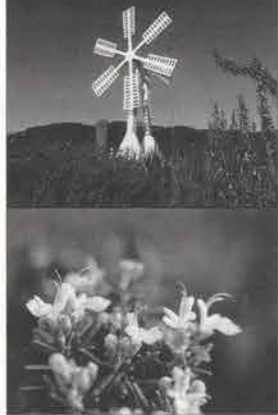
ローズマリーでまちづくり展開 作品に登場でシェイクスピア公園整備



丸山町企画広報課長
小宮貞夫

丸山町は、房総半島の南端部に位置し、南房総特有の温暖な気候にはぐくまれて、水稲、酪農、花き栽培など農業が基幹産業の町である。

この恵まれた自然環境と首都圏に隣接しているという優位性はあるが、半島地域であるがための制約や雇用機会が少なく所得格差などによる青壮年の都市部への流出が続く、高齢化・過疎化が著しく進んでいる。



風車とローズマリーの花

町活性化を進んでいる。

町の活性化を図るため、①丸山町らしさの創出②まちのイメージアップ③これからも愛される郷土を築く「まちづくり」に取り組んでいる。

丸山式風車

個性と魅力あるまちづくりのシンボルとして、町固有の農業技術文化である「風車」を

再登場させるとともに、新たな文化創造として、ハーブの一種である「ローズマリー」を活用したまちづくりを展開した。

丸山町は海岸近くの水田が、砂利田のため、昔、田の一角に井戸を掘って「はねつるべ」などの人力揚水を行い、農家は非常に水管理に大変苦労した。昭和初期には風車を回し、これに連動する「ガチャポン」と呼ばれるポンプで水を汲み上げる揚水施設「丸山式風車」が誕生した。

最盛期の昭和十八年ころは百基もの風車が林立し、のどかな田園風景を形成していたが、三十五年ころ石油発動機にその座を譲った。先人が大変苦労した、丸山町固有の農業文化である「風車」を、個性と魅力あるまちづくりのシンボルとして再現した。

ローズマリーは、地中海沿岸に自生している常緑性低木のハーブで、学名はロスマリヌス。ラテン語のロス（雫）とマリヌス（海）が語源で「海の雫」と言われ、春や秋、長雨の後に乾燥が続くと、海岸に白い波の雫が打

ち寄せるように一斉に咲き誇る。ヨーロッパでは昔から香草や薬草として広く利用されている。

丸山町は、北緯三十五度と地中海のクレタ島やキプロス島と同じ緯度に位置し、ローズマリーの栽培に適している。

多くの可能性を秘めた「ローズマリー」を導入し、まちの新しい可能性をつくり出す素材とした。

ハーブの魔力

「風車とローズマリーの里」から始まったまちづくりは、海を渡りイギリスにたどり着いた。

戯曲家ウィリアム・シェイクスピアの作品には、多くのハーブが登場する。ハーブには、不思議な魔力があると信じられていた。ローズマリーは、健忘症に効果があるとされている。

「ほら、これがローズマリー『思い出』のしるしよ。お願いだから愛しいあなた、私を忘

れないでね」(ハムレット 四幕五場)。

オフィーリアがハムレットにささやきかける。

シェイクスピアの生まれ故郷は、ストラットフォード・アポン・エイボン。ロンドンの北西約二百キロ、エイボン川のほとりののどかな田園で、四百年の時を刻んで美しく味わいのある家並みが保存されている。

それは彼の生まれた「バースプレイス」、母親の家「メアリー・アーデン・ハウス」、奥さんの家「アン・ハザウエー・コテッジ」、娘の嫁いだ「ホールズ・クラフト」、それに彼が晩年過ごした「ニューブレイス跡地」「ナツシユハウス」「トリニティ教会」などだ。ストラットフォードと同じように田園風景の広がる丸山町では、シェイクスピアの生家をそのまま再現しようと計画を策定した。

カントリーパーク

当初は設計やデザインスタッフ選定が課題でイギリス大使館に専門家の紹介を依頼。中世建築の研究家やシェイクスピアの研究家の紹介を受け、イギリスと日本そして丸山を結ぶプロジェクトが誕生した。

基本設計とデザインは、古典建築家ジュリアン・ビクネル氏が手がけ、生家の展示計画は、ジョン・ロネイン氏、景観デザインはリチャード・ハネイ氏などがそれぞれ担当。英

国と日本を何度も往復して細かな打ち合わせや考証を行い、本国イギリスでも大変話題になったシェイクスピア・カントリー・パークが平成九年に完成した。総工費は約十七億円。園内には生家を含め大きな三つの建物が並び、シェイクスピア・バースプレイスには、四百年前の家族が生活していた様子をろう人形などで詳細に再現した。

メアリー・アーデン・ハウスでは、アフタースーンティーが楽しめる。

しかし、十二年十一月二十九日にイギリスのデイルーテレグラフは「メアリー・アーデン・ハウスは、実は他人の家であった」と報じた。当時、イギリスでは「歴史考証に基づく事実認定を正直に受け入れ、新たな、歴史的発見の興奮を多くの人がと分かち合いたい」との声が聞かれた。

本国にもない建物

そして、もう一つの建物はシェイクスピア劇を紹介する展示室のニューブレイス。そのほかにイギリス式庭園、イギリス式最古の風車、マーケットクロスなど一歩足を踏み入れると、そこはイギリスの伝統とシェイクスピアの世界が広がっている。

とくに、シェイクスピアが晩年を過ごしたニューブレイスは、英国ストラットフォードでは十八世紀に取り壊されてしまっ

ては敷地と基礎が保存されているだけ。十六世紀に旅人が描いたスケッチをもとに世界で初めて復元され、シェイクスピア研究家、演劇関係者などの間では世界的に注目を浴びている。「本来英国にあるべき建物が極東の国、日本に完成した。でもシェイクスピアの文化や英国の文化が、日本に紹介されるほうが、英国にとってもっと大切である」と、イギリス人の大らかさを感じざるをえない。

また丸山町ではイギリスの文化を肌で感じて将来の新しいまちづくりに役立ててほしいと、毎年住民をストラットフォードに派遣している。

町の親書を携えてタウンホールを訪ね、首長に面会し、交流を行っているが、ストラットフォードには、日本のような地方行政体がなく姉妹都市の提携ができない。

多くの文化の違いを経験した住民から創造的なまちづくりのアイデアがこれからもわいてくることと思う。



シェイクスピア劇を紹介する展示室とイギリス式庭園

「ロシア文化に親しむ日」を開催 古くから日ソ交流の玄関口に



近藤淳一 新潟市国際課主幹

一 市と姉妹都市提携

新潟市は信濃川と阿賀野川の河口に位置する人口約五十一万七千人の都市である。国際港、国際空港を有し、航路と航空路でロシアをはじめとする日本海沿岸地域や世界各地と結ばれ、外国公館も大韓民国とロシア連邦の総領事館が開設されている。

新潟市はロシアに二つの姉妹都市を持つ。

昭和四十年に提携したハバロフスク市と平成三年提携のウラジオストク市である。ハバロフスク市と提携したのは、当時日ソ間で二番目だった。その後、昭和四十八年にハバロフスクとの間に開設された定期航空路は、新潟にとって初めての国際定期航空路。当時両国間の航空路は東京・モスクワ、新潟・ハバロフスクの二路線のみであった。

一方、ウラジオストク市は太平洋艦隊の母港のため、長い間、対外的に閉鎖されていたが、同市とは「開放」の一年前に提携した。平成五年には航空路で結ばれ、両市間の往来

が便利になった。ハバロフスク、ウラジオストク両市には日本総領事館が置かれている。そのほかにイルクーツクとの間にも航空路を有する。

もともと新潟は港町で、ロシア船も数多く入港し、市内でロシアの船員を見かけることも多い。まさにロシアとの玄関口だ。

実行委員会方式で企画

そんなロシアを市民により身近に、親しみを持つてもらおうと、初めての「ロシア文化に親しむ日」を、この六月十七日、新潟市と在新潟ロシア連邦総領事館の主催で開催した。当日は東京からパノフ駐日ロシア大使が出席された。

親しむ日開催に向け三月に第一回実行委員会を開き、企画内容を検討した。実行委員はロシア関係の友好団体、市内にある大学などに所属しており、広く関係者の知恵と力を集めることで事業にも広がりを持つたと思う。

実行委員の所属団体は、新潟・ハバロフス

ク・ウラジオストク友好市民委員会、新潟県日ソ親善協会、日本ユーラシア協会新潟支部、ロシア語同好会、(財)新潟市音楽芸能協会、新潟国際情報大学、新潟大学、県立新潟女子短期大学、新潟大学留学生センター、新潟大学ロシア人学生会、在新潟ロシア連邦総領事館、新潟市である。

以下、当日の内容を紹介したい。

まずロシア語によるスピーチコンテスト。

新潟市では初めての開催である。散文もしくは詩を朗読するという課題を与えた「入門の部」、五分以内に自作の文章を発表する「一般の部」の二部門に分けて行った。前出のロシア語のグループや大学で学ぶ市民や学生が応募、当日は合わせて二十八人が参加した。審査委員は大学のロシア語の先生方などで、審査要項は先生方が相談して作った。

緊張の面持ちで演壇に立つ発表者、それを聞く友人、家族、そしてロシアやロシア語に関心のある人びと、会場は熱気に包まれた。主催者の予想に反し、来場者が増え、いすを

途中で追加する一幕も。全部で約百三十人が集まった。

真展·民芸品展示

市民芸術文化会館内の劇場ホワイエでは写真展、民芸品展示などが行われた。ここでは実際にロシアに触れてもらおうと、いくつかのコーナーを設けた。

写真展は友好団体の提案で実現した。テーマは「私のロシア 私の心の中の一枚」。市民から募集、思い出の写真をもつ切り以下の大ききで提供してもらい、一言を添えてパネルに掲示した。ロシア人の顔、交流の際の写真、大自然の風景など、それぞれの思いが込められた九十三点が並んだ。それらの写真からはさまざまなロシアの表情が見て取れたと思う。

民芸品・民族衣装の展示は、在新潟ロシア連邦総領事館が担当した。総領事館所有の塗り物や白樺の皮で作られた小箱などの民芸品や焼き物、写真パネルと十二着の民族衣装の紹介である。衣装のうち九着は、ロシア人が実際に着用し披露した。

また ロシアのお茶・お菓子コーナーでは 総領事館のはからいでバハロフスクから空輸したお茶とお菓子などが提供された。濃く出したお茶をサモワール（湯わかし器）から出るお湯で薄めて飲む。本格的なロシアの飲み

方を紹介した。

また「ロシア人の好きな色とかたち」をテーマに新潟大学の中澤敦夫先生に講演をお願いした。当日は映画のシーンや画集などの映像を使い、ロシア人と赤い色の関係を聴衆に具体的に話してもらった。

コンサートは新潟近郊にあるテーマパーク「新潟ロシア村」のアンサンブル「ベリョースカ」(白樺の意)のステージである。「カチューシャ」「カリンカ」など全二十曲の歌と踊りの舞台は観客を魅了した。また、合間にロシア人国際交流員の簡単なロシア語講座を行ったり、市長と大使が「モスクワ郊外の夕べ」をロシア語で歌ったりと盛りだくさんのステージ。最後は観客全員で「一週間」などの合唱となった。この進行は市の音楽芸術協会からの実行委員が手がけたもので、その道のプロの力を改めて実感した。

クイズでハラショー!

講演会とコンサートの間には、観客全員に参加してもらう「クイズでハラショー!」(○×クイズ)を行った。問題はすべてロシアに関すること。クイズを通じ、ロシアを知ろうという狙いである。優勝者にはウラジオストクへの往復航空券を賞品として用意した。最後に残ったのが一組の夫婦、老若男女。皆が参加でき、会場が沸いた一時であった。

一方、市内の調理師専門学校の調理実習室では、講師にロシア大使専属のコックを招いて料理教室が行われた。応募した三十八人がボルシチとピロシキ作りに挑戦。講師のていねいな説明と総領事館の女性たちの協力を得ながら、参加者も出来上り到大満足。試食会も交流を図りながら楽しく過ごした。

七百人を超える参加者が二会場に足を運んだ。テレビや新聞などで報道されたことで、多くの人にロシアをより身近に感じてもらったと思う。

また、もう一つの収穫はロシアに関係するグループや団体、大学と総領事館や市がともに一つの事業を行うことで、より密接なつながりができたことである。もちろん、個々にはそれぞれ以前から関係はあったが、それぞれが持つ力を結集できたことは今後さまざまな事業を展開するうえで大きな力になるものと思われる。



(右)「ヘリユースカ」のステージ
(左)大使のコックを囲んでの
ロシア料理教室

ブラジル人、外国人登録者の六割に 新たな局面迎えた共生への取り組み



嘉村良子 浜松市国際室

国際交流の拠点

浜松市は人口五十九万人を擁する工業都市である。スズキ・ホンダ・ヤマハなど、輸送用機器・楽器産業部門で世界的に名の知られた企業があり、もともと市外から労働力を受け入れてきた土地柄でもあった。

平成二年の出入国管理及び難民認定法の改正施行により、日系人およびその配偶者は就労に制限のない在留資格を認められるようになった。このため浜松市に



来る外国人の数は急激に増加した。十三年五月末の外国人登録者数は七十四万九千人を超え、人口の約三・三%に当たる。中でもブラジル人が多いことが大きな特徴であり、外国人登録の約六割、およそ一万二千人にも達する。これは市町村で全国最多の数である。

浜松市では、三年、ブラジル人の増加とほぼ時を同じくして、「国際交流室」(現在の国際室)を設置した。翌年には、駅前のフォルテビルの一角に「浜松市国際交流センター」を開設し、財団法人化されたばかりの浜松国際交流協会(HICE)と連携しながら、浜松市の国際交流の拠点として本格的な取り組みを始めた。

具体的に力を入れて取り組んできた事業は、ポルトガル語通訳の配置や各種行政パンフレットの外国語版作成による情報提供の充実、日本語教室の開催や外国語による生活相談の実施である。また、国際交流イベントとしては、観客を巻き込んだサンバ・ステージがフィナーレを飾るHICE国際交流フェ

アや、ブラジル人が実行委員会を組織してスポンサーを集め、豪華な賞品がでるビンゴ大会が魅力の「ブラジル・ナタル」などが、恒例の大イベントとして毎年開催されている。

来日の理由

一方、ブラジル人コミュニティの間でも、

ブラジル人が増加し滞在が長期化するのに伴い、ブラジル人を対象としたビジネスが興ってきた。ブラジル銀行の出張所やブラジルレストラン、雑貨店の開店、四種類のポルトガル語新聞の発行、ブラジル学校(三校)の開校などである。

十年一昔とはよく言われるが、ブラジル人の増加が始まって十年が過ぎた今、彼らとの共生に向けた市の取り組みは新しい局面を迎えている。それは滞在の長期化や家族滞在の増加に見られるように「定住化」が進んできたことにより、さらに一歩進んだ「共生」への取り組みが求められるようになってきたということである。

十年前は、ブラジル人が増加するといっても、日本で働いてお金がたまれば数年で帰国するだろうという見方が主流であった。しかし、十二年三月に市国際室がまとめた南米日系人を対象にした調査結果では、七年以上滞在している人が全体の四割を超え、来日の理由も、「貯蓄」より「母国の経済や治安の状

況が悪いから」という答えが上回っていた。

これは生活の場としてブラジルよりも日本を選んでいくことであり、そこからは「労働者」というだけでなく「生活者」として考えていく必要性が再確認できる。これにより、医療や社会保障、教育、地域住民との日常生活レベルにおける共生が避けて通れない課題として顕在化してきたのである。

市の対応も、ブラジル人市民にいかに関心を持ってもらおうかという発想だけでなく、ブラジル人市民も地域活動に積極的に参加するなかで、共生の道を探っていくという非常にバランス感覚の求められるものになってきたように感じる。

外国人市民会議

一つの例として外国人市民会議の開催を紹介したい。

浜松市外国人市民会議は十二年に設立されたばかりである。そのきっかけとなったのは、十一年に外国人市民が自由に参加し、市長と

直接意見交換をする機会として

実現した「外国人市民と市長との懇談会」である。この懇談会

が好評で、今後もこのような機

会を望む声が多く、外国人市民

の声を市政に反映する継続的な

仕組みとして「外国人市民会議」

へと発展していったのである。

外国人住民の声を行政に反映するためのこういった会議は全国的にもいくつかあり、すでに多くの実績を積んでいる自治体もあるが、浜松市のようにブラジル・ペルーなどのニューカマー中心の会議は珍しいと言える。そこで、十二年度には会議の在り方そのものを主なテーマに話し合い、今年三月に出された提言の中では、外国人市民の声を市政に反映するというに加え、外国人市民と日本人市民の共生づくりへの取り組みも、会議の重要な目的として位置付けられるようになった。

外国人市民との共生に向けて、実際に力を持つているのはほかならぬ市民であり、日本人市民と外国人市民が互いに手を携え、自主的に地域共生に向けて取り組んでいくことが大切であり、市ができるのは、これらの活動を後押しすることだと思う。

世界都市化ビジョン

浜松市では昨年度から、今後の国際化・国

際交流の指針となる「世界都市化ビジョン」

を策定しており、共生を重要な柱の一つとして取り上げ検討してきた。そしてそのスタートアップ事業として、今年度、地域共生会議や学校に行っていない子供たちなどを対象にした日本語ボランティア支援事業、外国人市民カウンセリング事業など、市民の参加を得て行っていく事業に取り組んでいる。

また、共生への取り組みを市民へ広げていく一方で、同じように南米日系人が多く住む都市が一堂に会する「外国人集住都市会議」を開催し、外国人市民にかかわる施策や活動状況に関する情報交換を行うなかで課題解決に取り組むとともに、法制度の絡む問題については必要に応じて国や県などに提言していくことも考えている。

さらに十月十九日、二十日には「地域共生」と「都市間連携」をテーマに掲げた浜松国際シンポジウムを開催し、市内外からの参加を呼びかけ議論を深めていく計画である。

新しい事業にいろいろと取り組んでいる

が、外国人市民との共

生の先に、より豊かで

国際的な世界都市・浜

松の姿が現れる、なん

といってもそれが浜松

市の進むべき方向だと

考えている。



外国人市民会議のオープン会議で
発言する外国人参加者

官民挙げてトルコと交流活動

訪日使節団救助が縁



田嶋勝正 串本町長

エルトゥールル号

串本町は紀伊半島和歌山県の南端、本州最南端の地に位置し、面積八九・七七平方キロ、人口約一万六千人の漁業と観光を主産業とする町である。

明治二十三年九月十六日夜、当時のオスマン・トルコ帝国最初の親善訪日使節団が明治天皇との謁見を終えて帰国の途中、一行が乗った軍艦エルトゥールル号が、台風のため当町大島樫野崎沖で沈没するという海難事故が発生した。

嵐の海に投げ出された特派使節エミン・オスマン海軍少将以下五百八十七人が殉職、生存者はわずかに六十九人というみぞうの事故に際し、大島島民は献身的に生存者の救助、介護、殉職者の遺体の搜索、引き揚げに当たった。生存者は、わが国海軍の巡洋艦で無事帰国することができた。また、日本国内では犠牲者と遺族に義援金が集められた。

このことはトルコ本国に伝えられ、トルコ

国民の心の中に日本と日本人に対する親愛と敬愛の念を根付かせる端緒の一つとなった。

その後、串本町大島と姉妹都市を結んでいるメルシン市にそれぞれ慰霊碑が建てられ、当町とトルコ共和国との間で官民さまざまなレベルでの関係、交流を保ちつつ現在にいたっている。

慰霊から文化交流へ

エ号に関連して当町で行われる最大の行事は、五年ごとに駐日トルコ大使館との共催によるエ号殉難将士慰霊の大祭である。

トルコ政府の資金により昭和十二年に建立された高さ十二メートルの慰霊碑の立つエ号殉難将士招魂之地（大島）で行われる陸上追悼式典と、遭難海域で行われる洋上追悼式典の二部構成で行われるこの大祭には毎回駐日トルコ大使、トルコ海軍代表ほか日本・トルコ両国に關係する団体、機関のほとんどすべての代表者が参加する。

平成二年に行われた百周年祭にはセムラ・

オザール大統領夫人、メフテル軍楽隊が来町、トルコ海軍からはフリゲート艦「トゥルグットレイス」が派遣され、同艦上で洋上追悼式典が行われた。

百周年を機に慰霊を中心とした式典から文化交流事業へと軸を移行し、百五周年祭には

駐日トルコ

大使、トル

コに姉妹都

市を有する

自治体の首

長、両国友

好団体の代

表をバネリ

ストとする

フォーラムを

開催。昨年行

われた百十周

年は名称も「日

ト友好百十周

年祭」とし、



大島に建つ慰霊碑(昭和12年建立)

日本国を代表し三笠宮寛仁親王殿下のご臨席を賜り、トルコ海軍より再度派遣されたトゥルグットレイス艦上で洋上追悼式典を行ったほか、同艦乗員チームと町民選抜チームによる

サッカー親善試合、トルコ料理教室、トルコの遊びを通じた地元子供たちとトルコ将兵との交歓会が持たれた。

五年ごとの同式典は慰霊にとどまらず、両国友好を願う者が、一堂に会し現在の友好繁栄の原点に合ったものに立ち返り、今後のさらなる友好発展のための気持ちを新たにす

ネットワークの構築

昭和三十九年に黒海沿岸のヤカケント町と、五十年には地中海沿岸のメルシン市と姉妹都市提携を結び、定期に行われる青少年相互交流を基軸に、随時行政代表団の相互訪問が行われている。姉妹都市交流以外にも当町には毎年官民を問わず多くのトルコからの来客がある。多い年には百人を超える。

昨年両姉妹都市を訪問した際、姉妹都市各方面から現在の文化交流事業を経済交流にステップアップしたいとの要望がなされた。串本町においてもトルコとの関係を一つの基軸とした町活性化の方途を具体的に講じていくとともに、双方の情報が必要とするところに発信することのできるネットワークの構築に取り組んでいきたいと考えている。

トルコ民族舞踊団

当町とトルコとの関係を広く内外にピーア

ールし、民族舞踊を通じてトルコ文化に対する町民の理解を深めることを目的に、本年四月にトルコ民族舞踊団を結成、現在五十三人の団員が活動している。

自分たちが考え、自分たちが行動すること

を団の基本とし、行政は後方支援に徹しているが、このことが団員の認識を単なる住民から地域社会の一員へと、サービスを受けるだけの存在から与える側の存在へと変化させていった。

これまで二度、姉妹都市のメルシン、ヤカケントから民族舞踊団が来町したことがあったが、町内にトルコ民族舞踊の具体的な知識を有する人がいないため、在京トルコ人留学生会



のメンバー六人を招待し、五月の連休明けに一週間の集中講習会を行った。

団員の家庭にホームステイし、毎晩熱心に舞踊を教

えてくれる留学生たちの姿に団員たちも同じ熱意でこたえ、最終日まで完璧に踊りを習得することができた。

最後の練習を終えた後、団員が各自に持ち寄った料理で送別会を開いたが、用意したテーブルでは足りないほど手作りの料理が運ばれた。それほど、団員たちが今回の体験を通じて得た感動は大きいものだったのである。

六月十、十一の両日、外務省が招いた在トルコ友好団体若手幹部十人からなる代表団が来町した。

十日夜、町文化センターで歓迎の懇親会が行われたが、ここでも会場の準備から料理まですべてが舞踊団団員の手作りで行われた。もちろん彼らが習った民族舞踊も披露され、トルコ代表団からの喝采を浴びた。

団員たちは七月二十八日に行われた串本祭りでのトルコ民族舞踊の披露に向けて連日練習を続けた。彼らの姿勢は必ずや多くの人びとの共感を得、受ける側から与える側へと輪を広げていくことだろう。

町民の地域社会への関与の欲求というものはいまだ形をなさぬ流れとしてではあるが、確実に存在している。

この流れに具体的な形を与えることのできる環境あるいは場を提供していくことが、行政が果たすべき国際交流の業務であると考えている。

夏場の仕事着は官民ともにアロハシャツ ハワイアンムード満点の羽合町



秋久敏彦

羽合町企画観光課主事

歴史のまち

羽合町は、鳥取県のほぼ中央部に位置し、人口七千九百人、総面積一二・二二平方キロの平坦な田園の町である。北は日本海に臨み、ぶどう・イチゴなどの特産品がつくられている砂丘地帯が広がっている。南には通称羽合平野があり、水田地帯を形成している。

この地は、原始・古代より水上交通の要衝として栄え、橋津古墳群・長瀬高浜遺跡といった全国に誇り得る貴重な遺跡が確認されている。また、戦国期には毛利・尼子氏の橋津川合戦、羽柴秀吉の御冠山と吉川元春の馬ノ山の対峙など争乱の場として知られる「歴史のまち」で、同時に広大な県立東郷湖羽合臨海公園や馬ノ山公園などを有する「公園のまち」でもある。

基幹産業は農業だが、もう一つの重要な産業が観光であり、その中心となっているのが「温泉」である。湖上に浮かぶ温泉、はわい温泉は風光明媚な東郷湖畔に静かにたたずん

でいる。泉質は含石膏弱食塩泉で、リウマチ・皮膚病・婦人病などに効能がある。平成五年にオープンした温泉施設「ハワイゆーたうん」では、ガラス張りの天井をとおして星空を眺めながら気軽に入浴を楽しめる場所として好評を博している。

また近年、宅地開発が盛んに行われており、近隣市町村からの転住者も増加の一途をたどっている。このように羽合町は美しい自然を背景に、鳥取県中部の玄関口として、さらに中部圏の快適な住宅環境地として、新しい町、活力あるまちづくりが進んでいる。

この全国的にみても珍しい「はわい」という名称の由来であるが、古事に照らし合わせると千数百年前、大化改新のころ条里制が行われ、一時は伯耆の国司あるいは郡家が置かれた形跡があり、注目されたところである。

国司庁近くに「伯井田」の名称を有する部落があり、これを「羽合田」としたのが、羽合町の名の由来ではないかと言われている。その後、昭和二十八年四月一日、「町村合併

促進」の波を受けて四カ村が合併し、町制を施行して「羽合町」は誕生した。

町と温泉のイメージアップ

五十三年から「ハワイ」という名称を生かし、町と温泉のイメージアップのため、それまでの呼称「浅津温泉」から「羽合温泉」（現在は「はわい温泉」に改名し、全国的に「日本のハワイ」としてPRを開始した。

平成二年には、羽合町商工会と温泉旅館組合が国際交流のワンステッとして特製のアロハシャツを作成・販売したり、ハワイ人ダンサーを招致し、ハワイアンショーを開催するなどして徐々に機運を盛り上げていった。

これらの活動を出発点に、本町では「ハワイ」という同じ地名をもつ縁で、アメリカハワイ州ハワイ郡との姉妹都市提携に向けて、民間団体の交流を手始めに、交流員や視察団の現地訪問などを重ねた。八年十一月、羽合町国際交流推進事業・通称「アロハフレンドシップ」のメンバーがハワイ郡を訪問し、姉

妹都市提携が実現した。その後、相互に経済・教育・人の交流を積み重ねてきた。

経済面においてはハワイ郡日本人商工会議所と羽合町商工会との交流が深まり、相互間の企業視察を実施し、アロハシャツの直接輸入や、「羽合でハワイを体験」をキャッチフレーズにハワイ料理のレシピを作成し、レストランあるいは家庭への普及を図っている。このアロハシャツについては、商工会からの働きかけがきっかけとなり、十年から羽合町役場で夏季の仕事着としての着用が始まった。

当初は周囲から奇異な目で見られることも多かったが、その後、町議会においても議員全員の着用が決まり、マスコミにも大きく取り上げられるところとなった。この動きは、現在、町内の各企業や金融機関などにも及び、夏場のアロハシャツ着用のスタイルは町民にはすっかり定着した感がある。

ウクレレとフラダンス

教育においては、七年から語学教育に役買う「外国語指導助手」をハワイ州から招致し、中学校での指導を中心として子供たちの語学力と国際感覚の充実を図っている。また週一回、外国人講師による町民向けの英会話教室も行っている。

文化活動においては、十年に羽合町国際交流協会を設立し、ウクレレ教室を企画したり、

国際理解講座や国際料理教室を開いた。また、昨年からは町内女性の強い熱意により、フラダンス教室が始まるなど町民への広がりを見せている。毎年十一月に開かれる公民館祭りはハワイグッズの販売などの活動をとおして町民の国際化への意識の高揚を図っている。十二年から始まった「ハワイアンフェスティバル ハワイinはわい」では、フラダンスの愛好者団体に全国各地からご参集いただき、日ごろの練習の成果を華やかにステージで披露いただいている。

また姉妹都市提携をきっかけとして、相互交流事業も盛んになり、九年にハワイ州出身の外国語指導助手約五十人や元閣僚高見山の東関親方らをお迎えして「ハワイアンルアウバーティー」を開催。ハワイの文化や伝統料理を町民に紹介するとともに、共に協力して料理を作ったりと実りのある成果を上げた。

十年八月には、羽合町の小学生に参加を募り、十人を「アロハメイツ」としてハワイ郡へ派遣。現地でのホームステイと併せてワイアケア小学生との交流を行った。また、昨年七月に開催された「ハワイまつり」にはハワイ郡関係者、ワイアケアの中学生ウクレレバンド約四十人を招き、見事な演奏を披露していただいた。このように相互にホームステイを行い異文化を肌で感じるることによって町民レベルで友好交流の輪を広げている。

サミットの開催

十二年七月にはハワイと友好交流を行っている国内の三市町を羽合町に招き、「ハワイ姉妹都市サミット」を開催。国内での志を同じくする自治体との連帯感を強めた。

さらに本年八月からは、国際交流員として、ハワイ出身のアンドレ・ヘイグさんを羽合町役場にお迎えすることになり、当町のハワイとの結びつきもいよいよ堅固なものになろうとしている。

ハード面では、町内の県・町道の街路沿いにシユロの木を植樹したり、九年にオープンした羽合町健康福祉センター内のメーンホールを「ハワイアロハホール」と命名し、夜間は建物の外壁にハワイの海岸のイルミネーションを点灯させるなど、イメージづくりにも努めている。

これからも地方発の国際交流の先進地として、魅力あるまちづくりを目指していきたい。



(左)ハワイ姉妹都市サミット
(右)ハワイアンフェスティバルin羽合



花岡洋文

茨城県企画部長

百年の計

今日は、二十一世紀最初の年であるため、五十年後、百年後の県の姿について質問されることが時々ある。しかしながら、百年前に今日の姿をだれも予測できなかったように、今から百年後の姿を言い当てることは不可能であろう。唯一言えるのは、世界的には人口爆発により食糧・エネルギー問題が深刻になっている一方、わが国においては人口が減少し経済社会の維持が大きな問題になっていること、くらいである。

このような時代における地域経営、まちづくりのあり方について筆者の個人的な考え方を言わせていただければ、「課題対応型の暫定的なまちづくり」はもうやめて、「百年後に残る最終形のまちづくり」を行うべきだということである。

工業化が進む中で都市に集中する労働者の家を確保するため、あるいは自動車交通をさばくために、とにかく家を建て、道路を造る、そして二十～三十年経ったら造り直すということは、高度経済成長期・人口急増期には必要（悪）であったかもしれない。しかし、これではいつまでたっても富の蓄積を図ることができないし、今後はこのようなことを繰り返す余裕もなくなってくる。

また、日本全体としてはあと数年で人口が減少を始める中で、これ以上郊外の緑をつぶす開発を行うことはいかがかと思われる。もちろん首都圏のように、引き続き人口が増えるところもあるし、防災その他の観点から

郊外型の開発を行わざるを得ないところもあるであろう。しかし、一般論で言えば、そろそろ「まち」を広げるのはやめにして、現在人が住んでいるところをどう変えていくかを考えるべきではないか。今から十年かけて開発事業が完成するころには、人口は減り始めているのだから。

このような「都市の再構築」に対しては、時間がかかる、費用が高いとの批判があるかもしれないが、長い目で見ていただければ必ずその重要性をご理解いただけると思う。東京のような大都市のみならず地方の中小都市においても、商店街の活性化というような特定の分野の話ではなく、人びとの暮らし方、生き様の問題として住まい、福祉サービスの提供など総合的な視点に立った取り組みを行っていくことが必要である。

先日、朝のTVを見ていたら、富山県の住宅面積は日本一であるが、これは親子何代にもわたって同じ場所に住み、増改築を重ねた結果であるとの番組があった。まちづくりもこれと同じではないだろうか。西欧の例を挙げるまでもなく、二十年や三十年という単位で後生に残すべきまちづくりができるわけではない。しかし、こつこつと事業を進めていけばいつかは必ず完成するのである。

最後に一つだけ、まちづくりに関して具体的な提案をしたい。それは駐車場の整備を強力に行うことである。

まちの中心部に人を呼び戻すため、あるいは電車・バスなどの公共交通機関の利用を促進するためには、パーク&ライド、キス&ライド用の駐車場の整備がやはり不可欠である。現在の制度では、駐車場は道路のおまけ、あるいはいわゆるハコもので料金で採算をとるべきものとされているが、もっと正面から公共費を投入してもよいのではないか。幸いにして道路特定財源の見直しの動きもある。

日本の
中外国



曼荼羅と絵師サン・ドージ・トラチャン氏

瞑想の郷につくられた花曼荼羅

●ネパールと曼荼羅＝富山県利賀村

特産の「そば」を生かした地域づくりを進めている利賀村は、冬のイベントとして「利賀そば祭り」を開催している。そばの原産地であるネパールヒマラヤ山麓のツクチュ村とは姉妹村を締結し、「金剛界曼荼羅・胎藏曼荼羅」をはじめ貴重な文化資料を展示する「瞑想の郷」を建設し、自然環境豊かな利賀村での癒しの場を提供している。



SWISS

●スイス村=京都府弥栄町

昭和49年に緑豊かなスイスの素晴らしさに感動した当時の町長が、過疎からの脱却を図る決め手として「弥栄町スイス村構想」を発表し、53年7月オープンした。

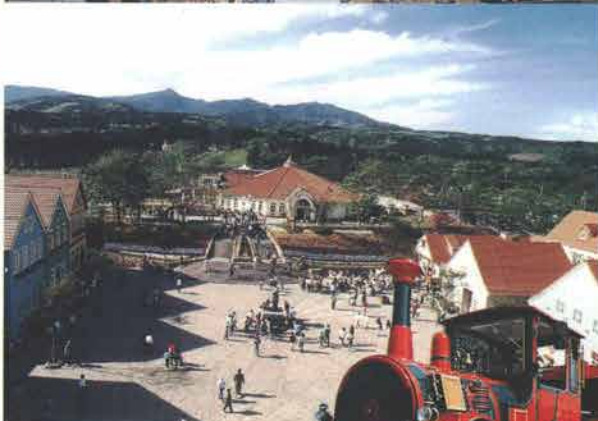
夏はキャンプ、テニス、冬はスキーと標高600mのスイス村でさわやかなひとときを楽しむことができる。



GERMANY

●ドイツ村・クローネンベルク=群馬県宮城村

赤城の大自然の中に、牧場と田舎の擬似体験ができるドイツ村がある。第三セクターでつくった赤城高原牧場クローネンベルクは広さ35㌥。石畳の道、木組みの家、時計台があり、大道芸も楽しめ、ドイツムードを満喫できる。



SPAIN

●ザビエルのまち=山口市

日本に初めてキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルが山口に滞在し布教を行ったことから、出生地ナバラ州の州都パンプローナ市と昭和55年に姉妹都市を締結した。観光名所でもあるザビエル記念聖堂の再建、民間団体の活動などで静かにではあるがスペインは市民の中に浸透している。



スペインをイメージしたポケットパーク



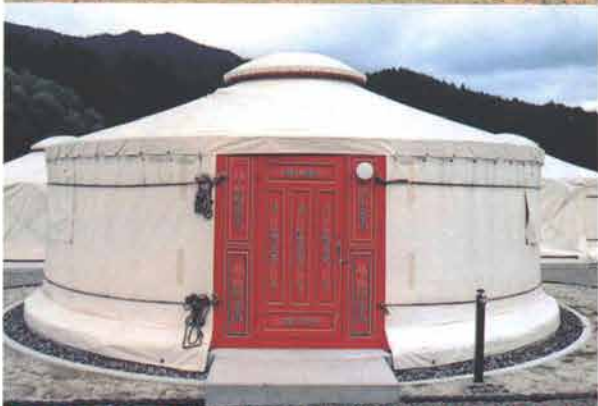
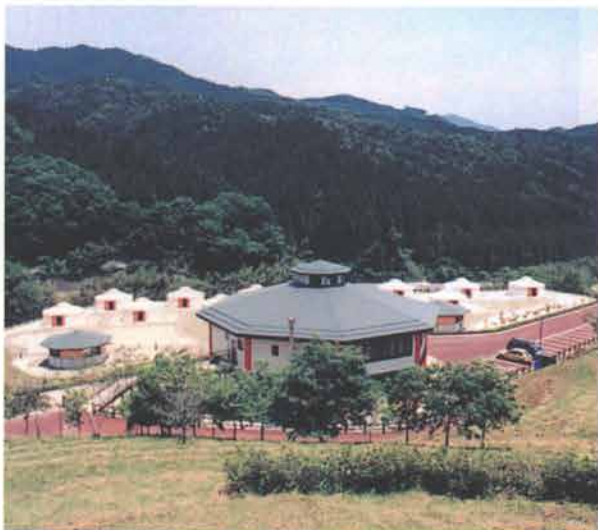
スペインカーニバル



MONGOLIA

●モンゴル村とゲル=岐阜県上矢作町

豊かな自然に囲まれ平成12年にオープンしたフレッシュな異国的キャンプ施設。モンゴルから直接輸入した18棟の宿泊テント（ゲル）には4人まで宿泊できる。外では、ジンギスカンのバーベキューでモンゴル気分を満喫できる。6月には1万本を超えるユリが、訪れる人を出迎えてくれる。利用期間は、4月から10月まで。



SCOTTLAND

●スコットランドの建築物Ⅱ北海道余市町

余市町は昭和六十三年に、ニッカウヰスキーの創設者である竹鶴政孝氏の夫人、リタさんの生まれ故郷、英国スコットランド、イースト・ダンバートンシャーイア市(旧ストラスケルビン市)と姉妹都市を提携、その後の記念事業の取り組みとして国道沿い約一・三キロをリタロードと名づけ、スコットランドをイメージする建築物を整備した。



(左)余市町図書館(上)消防庁舎を姉妹都市の中学生使節団が訪問
(下)リタロード案内板



NETHERLAND

●オランダ島Ⅱ岩手県山田町

寛永二十年(一六四三)、オランダ船ブレスケンス号が探検航行中、悪天候のため山田湾に入港したとき、異国の人びとを山田町の人たちは温かくもてなしたという史実があることから湾中央に浮かぶ島を「オランダ島」と呼ぶようになった。オランダとの交流を進めてきた山田町は平成十二年、オランダ・ザイスト市と友好都市を締結し、交流を推進している。



オランダのフィーエル・ヤッペン(運河跳び競技)を真似た山田版の運河跳び大会



CANADA

●金田とカナダⅡ福岡県金田町

平成三年度カナダをメーンに、ニュージールランド、オーストラリアの車いすの選手と交歓会を行った。四年度には飯塚国際車いすテニス大会が、金田ふれあいスポーツ公園で初めて開催され、十五カ国百六十八人の選手が熱戦を繰り広げ、現在も金田町の主要イベントの一つとして開催されている。



「旧町村」復権のススメ

平

成の市町村大合併」の足音が高まってきた。生活圏の広域化や地方分権への対応など、基礎的自治体の行政能力を拡充する必要性が増してきたことに加え、財政再建という国家的要請が、合併推進の流れを加速させている。小泉政権の誕生で、その旗色はより鮮明になった。

国による合併の促進に異を唱える声は多い。合併はあくまで市町村とその住民の自主性が尊重されるべきで、地域性に十分な配慮がなされなければ「身近な住民サービスが低下する」、あるいは「中心と周辺の格差が拡大する」といった主張である。市町村の現場で熱意をもって働く人ほど、国の合併推進姿勢に対する違和感は強いに違いない。

さらに、国が手厚く財政調整を行う現行の行財政システムを、そのまま維持することが困難であることも、また多くの人が認識するところであろう。

明治以来、わが国の市町村は二度にわたって大きな再編を経験した。明治二十二年の町

村制の施行により、約七万あった自然村を一万五千余りに再編した「明治の大合併」。そして、昭和二十八年から三年をかけ、一万弱あった市町村を三千九百余りに再編した「昭和の大合併」である。

昭和の大合併以前の町村を「旧町村」と呼ぶ。昭和の大合併からすでに半世紀が過ぎようとしているが、旧町村という単位は消えてしまったのだろうか。一見、合併後の一体性が形成されているように見えても、どこい旧町村は生きている。冠婚葬祭や祭り、あるいは選挙しかりである。この事実はある地域エゴという以上の意味を提起していると考えたい。

二度の大合併をへて、基礎的自治体である市町村の「門構え」は格段に大きくなった。平成の大合併が、より大きな門構えを志向するのなら、大切にしなければならないのはその内部構造である。

本間に地域に密着した行政運営を行おうとすれば、現在の市町村はすでに大きくなり過

ぎたともいえる。とりわけ、過疎地域や山間地の将来像を考える場合には、旧町村はもとより、明治の大合併以前の「自然村」や「集落」単位で検討しなければ、有効な対策が描けないことは自明であろう。

こうした小さな地域単位に改めて目を向け、広域行政とともに狭域行政にも配慮することが、平成の大合併の成否を分けるのではないだろうか。

現行の合併特例法では、合併前の自治体の意向が合併後の自治体運営に反映できるよう、地域審議会の設置を認めている。しかし、現在の市町村の枠にこだわり過ぎては、過度の利害対立が生じることも危くされる。この際、旧町村を復権し、その住民が求めるならおのおのに長をおいてはどうか。ただし、その長はあくまで住民自治のリーダーであり、ボランティアでなければならない。

column



PHPP総合研究所主任研究員
荒田英知

ジョン万次郎スピリットでトライアングル交流 漂流での救助、帰国の地が縁



植杉英輔 土佐清水市企画広報室主事補

日本人留学生第1号

土佐清水市は、幕末から明治にかけて、日本の開国に大きな役割を果たしたジョン万次郎（中浜万次郎）のふるさとで、「ジョン万」をキーワードにしたまちづくりを行っている。

ジョン万次郎は、文政十年（一八二七）、現在の土佐清水市中浜で漁師の二男として生まれた。天保十二年（一八四一）、十四歳のとき、足摺岬で操業中に漂流し、米国の捕鯨船に奇跡的に救助され、日本人として初めて米大陸に上陸した。万次郎は「ジョン・マン」という名で、フェアヘーブンやニューベッドフォードの人びとに可愛がられ、ホイットフィールド船長の厚意で、初等、中等教育を受け、また、英語、数学、航海および造船学、歴史学などを学んだ日本人留学生の第一号でもある。

さらに、三年四カ月にわたって世界を一周する捕鯨船の副船長としても活躍した。二十四歳のとき、日本の開国の必要性や母を想い、

死を覚悟して鎖国の日本に帰る決心をし、ハワイを経て、嘉永四年（一八五二）、琉球に上陸した。しかし、鎖国のおきてを破った罪に問われ、琉球、長崎、土佐で長期にわたって繰り返し取り調べを受け、万次郎が中浜の故郷に帰ったのは、嘉永五年（一八五三）のこと。母と子は十二年ぶりに感激の再会を果たした。

万次郎を必要とした時代

土佐藩は万次郎に故郷から外に出ることを一切禁じたが、時代は万次郎がアメリカから持ち帰った新知識や新技術を必要とし、母のもとにはわずかに三日三晩ただけで土佐藩主から召し出された。さらにベリー提督が日本に開国を要求した際は、幕府に出頭を命じられて、国家の難事に尽くすこととなり、「日米和親条約」締結に至るまでの功績は計り知れないものがある。その後の咸臨丸での活躍をはじめ、日米交流のかけ橋となる人材育成に努めた。

このジョン万次郎のとりもつ縁で、昭和六十二年十二月二日、米国マサチューセッツ州フェアヘーブンとニューベッドフォードの二つの都市と姉妹都市を、また平成五年二月三日には、日本へ帰国した際、六カ月にわたって生活した沖縄県豊見城村と国内での姉妹都市を結んだ。

漂流という最大の困難を最大の味方（幸運）に転じる生き方。どんな困難に遭っても希望をもち、決してひるまない強い力と夢を形に変える行動力。ジョンマン・スピリットを次代を担う子供たちに伝え、学習



足摺岬に立つジョン万次郎像

するとともに、異国の少年万次郎を温かく迎えてくれた米国の両都市や豊見城村の人びとと交流を通じて、四国最南端「土佐清水市」から、ジョン万次郎に続く人材育成の各種事業を展開することとなった。

米国姉妹都市との交流を継続的に実施するため、昭和六十三年二月にその母体となる土佐清水市姉妹都市友好協会設立総会が開催された。立ち上げ当初だったことで万次郎の資料も少なく、資料収集活動と併行しながらの米国との交流が始まった。

交流の輪

本市の唯一の高校である、県立清水高等学校創立四十周年を記念し、六十三年七月米国姉妹都市への短期留学制度が始まり、昨年まで引率教諭を含め、延べ百二十人の高校生を派遣した。その間、米国姉妹都市委員会のメンバーを中心にホームステイなど大変お世話になり、高校生にとって異国の文化にふれると同時にジョン万次郎を温かく迎え入れた米国の人びとと心の交流ができ、大きな財産となった。ジョン万次郎が米国で見て、体験してきたことで、日本の開国に貢献してきたように高校生も学業に、その後の社会生活においてもこの交流がきっかけになっている。また、小さな公立校の唯一の特色として定着しており、近年では短期留学を希望する生徒も

増えてきている。ほかの生徒にとっても不定期ではあるが、たびたび訪れる米国の高校生と授業や体験を通しての交流により、外国を身近に感じとれるようになっていく。今年は六月二十日・七月三日まで、十人の米国姉妹校の高校生などが本市を訪れ交流を深めた。

米国とのスポーツ交流は、平成四年に始まり、少年野球チームを本市から二回、延べ四十七人を派遣、米国からは三回、延べ百六人が本市を訪れスポーツという共通のルールを通じ交流を深めている。また豊見城村とは、少年野球、バレー、剣道、サッカーに始まり昨年は本市から相撲少年団を派遣。春・夏休み中に本市から計三百八人を派遣、豊見城村からは計三百五十一人が本市を訪れた。

ジョン万次郎もそうであったように、子供たちが米国との言葉の壁もおかまいなしで身振り手振りでコミュニケーションを行い友情を深める様子はほほえましく、たくましくもある。昨年は本市と米国と豊見城村の子供たちが沖縄に集まり沖縄サミット記念「ジョン万杯・日

市内の相撲少年団が米国少年野球チームに相撲の指導

今年も姉妹都市より高校生など10人がホームステイ



米少年野球大会」を開催。会議に参加していたクリントン大統領と代表の子供たちが握手するなど記念となる大会になった。現在この三者が米国で交流する話もできつつあり友好の輪が大きく広がっている。

次代を担う国際人の育成

米国で隔年ごとに開催される「ジョン万祭り」には市民から募集して姉妹都市親善訪問団を派遣し、日本文化の紹介をしながら交流を続けており、米国からたびたび本市を訪れ交流を深めてきた。国際交流を目指す主婦たちが中心となり平成二年に発足した「ウェルカムジョン万の会」は米国の訪問者たちのホストファミリーとなり活躍している。

豊見城村の「ジョン万を語る会」、米国の姉妹都市委員会など各団体・個人の協力により交流事業は成り立っている。

土佐清水市姉妹都市友好協会では、厳しい財政状況の中で次代を担う子供たちのために積極的な交流事業を展開し、支援することを確認している。なによりも限らない可能性を秘めた子供たちが世界を体験すること、大きな視野をもった国際人として活躍することを願って、不可能を可能にし前が見えてきたら、後は自分の力で進む「ジョン万スピリット」をキーワードとして地域づくりに頑張りたい。

国を代表する焼き物のまちが交流 マイセンの森、有田通りを友好の証に



有田町商工観光課
多岐島道彦

有田とマイセン市の出会い

有田町は、佐賀県の西部に位置し、人口約一万三千五百人のやきものの町として古くから栄えてきた。今から約四百年前、朝鮮人陶工李参平^{りさんへい}らによってやきものの原料である陶石が発見され、日本で初めて磁器が焼かれた。以来、佐賀藩のもとで、磁器生産が本格化し、谷あいに「有田千軒」と呼ばれる街並みが形成され、繁栄を極めた。現在も歴史的価値の高い建物が数多く残っており、平成三年に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された。



本町は、ドイツ・マイセン市、中国・景德鎮市と姉妹友好都市関係にあり、とくに関係が深いのはマイセン市だ。同市はヨーロッパ磁器発祥地でその歴史は三百年と古い。有田町とのつながりは十七世紀中ごろの

オランダ貿易までさかのぼる。

当時、何千何万という大量の有田磁器が、オランダ東インド会社の船で有田から伊万里、そして長崎（出島）を経由してヨーロッパへ輸出された。そのころ、ドレスデン一帯（ザクセン地方）を支配していたオーガスタ・ストロング王は、日本磁器に魅了され、ドレスデン近郊のマイセン・アルブレヒト城で製陶を興させた。十八世紀前半は、マイセンはもとより、オランダのデルフト窯や、イギリスのチェルシー窯などで古伊万里風の絵付けや柿右衛門風の磁器が製作されるなど、いわゆるシノワズリー（中国趣味）やジャポネズリー（日本趣味）的な傾向が強く、その流れはヨーロッパ全域に広がり、大小四十近くの窯で有田のデザインが模写された。十八世紀初めのマイセン焼きは柿右衛門様式の模写から始まった。

ホームステイ体験事業

姉妹都市の縁組みはこうした歴史的交流を

経て、昭和四十五年八月、まだ国交のなかった旧東ドイツを七人の有田の窯業人が訪れ、ドレスデン市のツヴィンガー宮殿磁器館で、膨大な数の古伊万里様式や柿右衛門様式などの有田磁器を目の当たりにし、その感動を持ち帰ったことに始まる。

五十年に開催された福岡大博覧会で、国立ドレスデン博物館秘蔵の古伊万里「里帰り展」が実現したとき、有田町長が姉妹都市提携を申し入れた。さらに当時参議院議員で日本・東独友好議員連盟の鍋島直紹氏や、東独・日本友好議員連盟会長のハンス・モドロ氏の仲介で、五十四年二月九日、有田町の青木類次町長と国立マイセン製作所カール・ペーター・マイン総裁との間で姉妹都市の調印が行われた。「ベルリンの壁」崩壊によるドイツ統一後、有田町とマイセン市は新たな出発として平成三年九月、マイセン市でゲルハルト・ヴァルトッシュ同市長と有田町の川口武彦町長との間で姉妹都市の再調印が行われた。

それ以来、双方のまちに民間組織である友

好協会が設立され、ともに「ふだん着の姉妹都市交流」を目指している。

有田町の場合、青少年友好親善ホームステイ相互交流事業を重点にしながら、情報誌の発行や、市民同士の友好と親善を深めるさまざまな事業に取り組んでいる。とくに、平成四年から始まったホームステイは、現在まで十回相互交流が行われ、お互いの国の生活習慣や文化などの事情について理解を深め、友情の絆を深めている。この事業実施の経緯について友好協会会長の手塚英樹氏は、「時代を担う子供同士が豊かな国際感覚を持って、新たな視点から姉妹都市を創造していった欲しいという希望からだった」と語る。

有田町での記念事業

有田町とマイセン市の姉妹都市提携二十年を迎えた十一年二月、有田ダム公園にある「マイセンの森」でさらなる友好発展を願う記念植樹を行った。有田町長とマイセン市長は双方で二十周年記念事業を展開していくことを確認。そこで有田町では、「有田とマイセンの風に舞う」事業実行委員会を発足し、記念事業への準備を進めていくこととなった。

同年五月二日から九日まで、マイセン市から総勢三十七人が訪れ、有田陶器市期間中（四月二十九日～五月五日）、マイセン製陶所の職人による絵付け技法の披露や、陶磁器、錫製

品、マイセンビール、はちみつなどの販売や、踊るポーセリンの公演、音楽演奏など多彩なイベントを開催し、有田陶器市に彩りを添えた。

また「市民交流の夕べ」では、マイセン市の風景パネル展示や、歌の大合唱、そして有田町民とマイセン市民が一つの輪になって、皿踊り（有田の伝統芸能）をするなど市民交流を深めた。

皿踊り隊

有田町での記念事業に続き、九月には有田町長を団長とする訪問団四十七人がマイセン市を訪れ、同地最大のイベント「ワイン祭り」に参加、五月に有田町を訪れたマイセン市民とも再会し、友情の輪が大きく広がった。マイセン市役所前広場のギャラリーに日本文化を紹介する「有田店」を開き、お茶会や生け花、書道、折り紙などの実演のほか、陶磁器（そば猪口）の展示販売や書と日本画教室を開催、またアルブレヒト城美術館では「有田とマイセンの現代磁器展」を開くなど、やきものを通しての交流も深めた。また、「有田屋台」を設け、日本酒のふるまいやたこ焼きの実演販売を行った。

揃いの法被や着物姿の有田町民、マイセン市民計五十八人による混成「皿踊り隊」のバレードは沿道を埋め尽くした観衆から大きな拍手を受けた。

このほか、マイセン市の振興市街地の通りを友好のシンボルとして「有田通り」と命名、桜の苗木を植樹した。

また、有田町は六年度からドイツ人国際交流員の招致を開始。国際交流員は今年で五人目となり、主にマイセン市の連絡調整や外国人観光客・来賓の通訳、外国語観光パンフレットの翻訳作成などに力を発揮、ホームステイ相互交流事業においては欠かせない存在になっている。

両都市の交流について手塚英樹氏は「最初の十年は国の事情で市民レベルの交流ができなかったが、この十年間は地道な活動の積み上げで草の根交流の輪を広げてきた。今後は市民レベルの交流をさらに活発化させ、やきものを中心に相互の文化や歴史、生活観の理解を深めたい」と抱負を語った。



マイセンのワイン祭りに参加。マルクト広場での皿踊り隊バレード

地域国際化推進施策について

近年、交通手段、情報通信技術などの発達で、各国・地域間の時間距離が急速に短縮され、国境を越えた人や情報の往来が飛躍的に増大してきた。国の枠を超えた相互依存関係の深まりなどにより、国際化への対応は国家レベルに限らず、地域レベルの課題として積極的に取り組む必要がある。本号では、総務省が推進する国際化推進施策について紹介したい。

1 語学指導等を行う外国青年招致事業(JETプログラム)

わが国における外国語教育の充実を図るとともに、地域レベルでの国際交流の進展を通じて、諸外国との相互理解の増進に資するため、総務省、文部科学省、外務省および自治体国際化協会の協力で、昭和六十二年度から地方単独事業として語学指導などを行う外国青年の招致を実施している。本事業は、中学生・高校生の外国語教育や地方公共団体の国際交流施策の推進に貢献するとともに、地域住民に外国文化に触れる機会を提供して地域における国際理解や国際感覚の増進に寄与している。また、招致青年を介して、地域住民と在住外国人との交流の深化を実現しているほか、生活上必要な情報の提供など、在住外国人に住みやすいまちづくりの施策実践に

も役立っている。

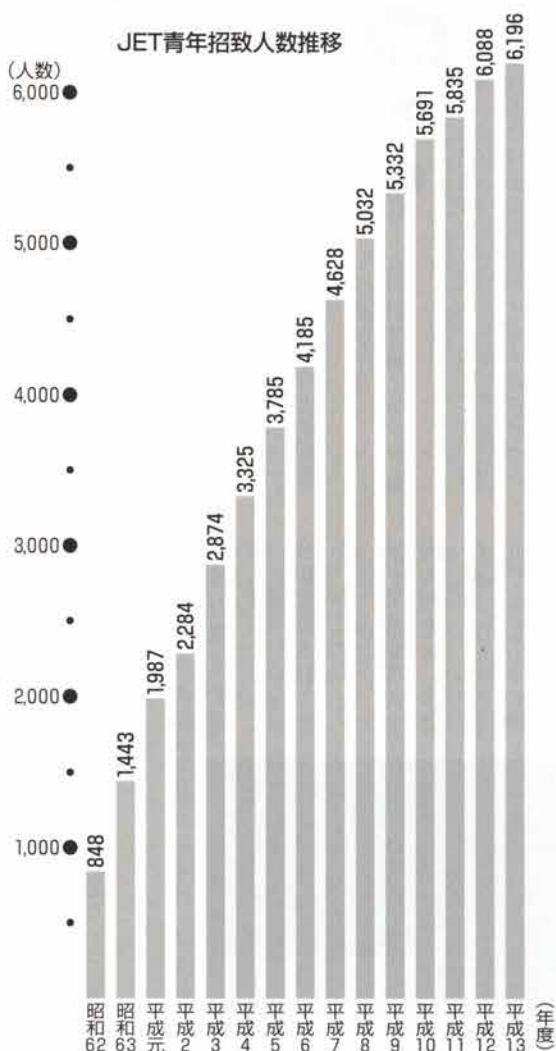
2 姉妹都市交流の推進

わが国の姉妹都市提携は、近年まで大規模

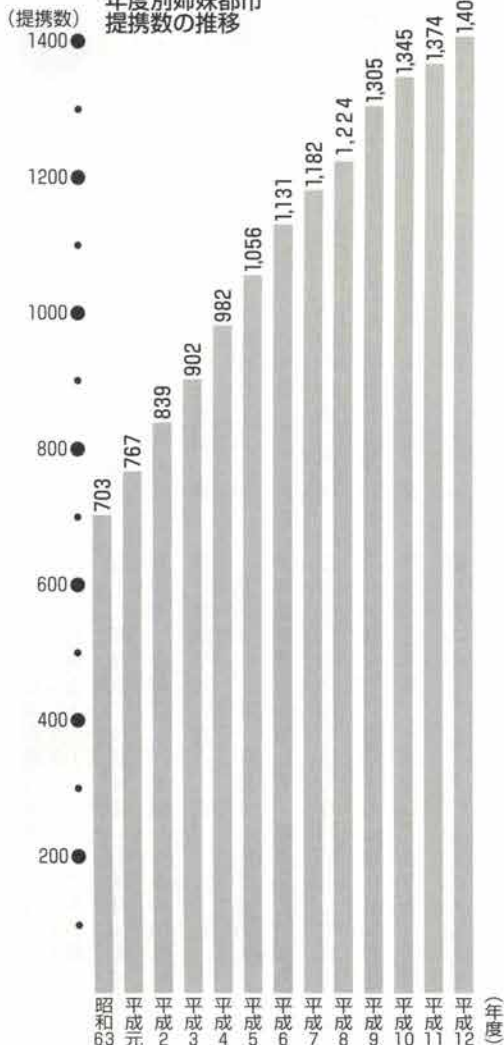
都市に多かったが、現在では小規模の市町村においても活発に交流が行われている。また、交流対象国は従来、アメリカやヨーロッパの国が中心だったが、最近では中国、韓国などのアジア諸国が多くなりつつある。

昭和三十年に始まった日本の姉妹都市提携は、平成五年十二月一日に千件を突破し、十三年四月一日現在で三十九都道府県および八百九十一市区町村が計千四百七件の姉妹都市

JET青年招致人数推移



年度別姉妹都市提携数の推移



を締結している。

3 日韓地域づくりリーダー交流事業

十二年から十四年までの三年間を「日韓地域交流促進期間」とすることが日韓政府間で合意されたことを受け、日韓の地域レベル・住民レベルの交流を一層活発にするため、地域づくりリーダーとして活躍している住民を相互に招致し、市町村などにおいて意見交流会、交流会などを行う。

十二年度は、十一月に韓国から地域づくりリーダー五十四人を八日間わが国に招致し、十道県二十一市町村などで活発な交流事業を実施した。

また、十三年度は、十月に日本から韓国へ地域づくりリーダー五十人程度を派遣し、韓

国の各地域においてさまざまな交流を行う予定である。

4 日韓・日中自治体国際文化交流支援事業

近年、地域に根ざした文化交流、とくに隣国の韓国、中国との交流の重要性が高まっていることから、地域主導の文化交流事業の取り組みを一層盛んにするため、市町村または市町村と民間団体が共同して行う先導的な文化交流事業を支援する。

支援にあたっては、日韓、日中の文化交流に見識ある有識者および地方自治関係者からなる審査委員会を設け、市町村からの申請を受けて、対象事業を決定する。十二年度は、韓国との交流事業を中心に十二団体の事業を支援した。十三年度も同様に十三団体の事業

を支援予定である。

5 「世界に開かれたまち」大臣表彰

地域の総合的な経営主体である地方公共団体は、国際化の進展に対応して、地域における国際化のための環境を整備し、国際化を計画的に推進して、世界に開かれた地域社会を形成していく必要がある。また、従来の国家間の国際協力だけでなく、地域に密着し生活に根ざした分野での国際的な協力も求められている。

このような状況を踏まえ、「地域の国際化」において総合的、先進的な取り組みを行っている団体の功績をたたえ、広く全国に周知することを目的として、六年度から大臣表彰を実施している。

6 外国教育施設日本語指導教員派遣事業(REN計画)

海外での日本語教育に対する協力要請にこたえ、わが国の教員を外国の中等教育施設へ派遣し、日本語教育に従事させるとともに、教育・文化交流活動を通じて教員の指導能力の向上と国際性のかん養を図る。そして学校教育の国際化および地方公共団体による地域レベルの国際交流の推進に資する。

さらに外国教育施設日本語指導教員派遣事業(REN計画)を文部科学省と共に実施している。

7 国際交流に係る人材の養成

三年度から地域の国際化に対応できる地方公務員を養成するため、「地方公務員海外派遣プログラム」を創設して、地方公務員の海外派遣を支援しており、十三年度は五人を派遣した。

また、五年四月、主として市町村職員の国際化対応能力を向上するため、滋賀県大津市に全国市町村国際文化研修所（国際文化アカデミー）を開設。「国際交流研修コース」に加え、地域レベルでの国際協力を推進するための人材育成を行う「国際協力研修コース」、地域国際化協会をはじめとする自治体関連の民間国際交流団体の役員および職員を対象とした「国際交流団体職員研修コース」、韓国、中国、東南アジアを対象とした「派遣研修コース」などを実施している。

8 地域レベルにおける国際協力の推進

七年四月に「自治体国際協力推進大綱の策定に関する指針」を示し、各都道府県・政令指定都市に大綱を策定するよう依頼。八年度から地方公共団体が海外の地方自治体などの職員を受け入れる場合、総務省および財自治体国際化協会が支援する「自治体職員協力交流事業」および地方公共団体が実施する先駆

的意義のある国際協力事業を財自治体国際化協会が総務省と協力し、「モデル事業」に認定して積極的に支援する「自治体国際協力促進事業」を創設し、地域レベルの国際協力事業を推進することとした。

最近では、十一年度から国際協力人材バンクの登録者を活用して、地方公共団体の職員などを自治体国際協力専門家として外国の地方自治体などに派遣する「自治体国際協力専門家派遣事業」を創設し、地方公共団体の国際協力の中心となる人づくりへの協力を支援することとした。十三年度は六人の派遣（中国）を予定している。

9 「市民国際プラザ」の設立

地方公共団体が特色を生かした多様な国際協力の取り組みを一層促進するためNGOとの連携を進めるため、十一年七月に「市民国際プラザ」を設立し、国際協力に関する情報の収集・ストック・提供、国際協力の案件形成に対する支援などを行っている。

10 WTO協定等国際協定への対応

ウルグアイ・ラウンド交渉の成果として七年にWTO（世界貿易機関）が設立されて以来、地方公共団体と関係のある国際協定（政府調達協定、補助金協定、スタンダード協定、

サービス協定など）が増加しているが、WTO次期交渉のうち、サービス協定・農業協定については十二年から交渉が開始されており、今後、地方公共団体に対し少なからぬ影響が及ぶことも予想される。

このような状況を踏まえ、総務省としては、既存の国際協定の運用に資する助言や情報提供などを行うとともに、WTO次期交渉などの国際協定締結交渉における地方公共団体への協定適用の在り方について、地方公共団体の理解と協力を得ながら、国際協定に対する取り組みを強化していくことにしている。

11 国際化推進のための財政措置の充実

地域の国際化を推進するため、地方公共団体が取り組む国際化推進施策に対して所要の財政措置を行っており、十三年度においては、引き続きJETプログラム、自治体職員協力交流事業の充実など、地方公共団体の取り組み国際交流・国際協力事業を推進するため、地方財政計画において、十二年度と同額の千二百七十億円を計上している。

以上のように、総務省として、このような地方公共団体の取り組みを、引き続き積極的に支援していきたいと考えている。

OPICS 元寇720年記念イベントを実施

少式資時公の銅像を建立



西村善明

長崎県吉野郡元寇七百二十年
記念事業実行委員会事務局長(芦辺町)

事業実施のきつかけ

「元寇から鎌倉まで」をメインテー
マに平成九年十月、長崎県元寇郡郷
ノ浦町と勝本町で元寇活劇が、芦辺
町では瀬戸浦元寇神社で元寇シンボ
ジウムがそれぞれ開かれ、島内外か
ら多くの人が集まった。元寇は、文
永の役(一二七四年)と弘安の役
(一二八一年)の二度、元軍の襲来
を受けた地として知られ、そのシン
ボジウムで一人のバネラーが「弘安
の役の主戦場で壮絶な最期を遂げた
少式資時公の銅像一つないのはな
ぜ。瀬戸浦はこれでいいのか?」と
発言、出席者の拍手を浴びた。

二十年記念事業実行委員会が発足し
た。農・漁協、商工会、観光協会、
議会などの代表者で構成、官・民一
体化した組織となった。

同委員会は十三年が元寇弘安の役
から七百二十年目に当たることか
ら、五月二十日に記念イベントをや
ろうということに一致。また、時を
同じくして同年のNHK大河ドラマ
が元寇を迎え撃った執権北条時宗と
決まったことでイベントの内容を①
元寇での元寇守護代・少式資時(弘
安の役で戦死)公銅像の建立②元寇
遺跡の整備③NHK大河ドラマの元
岐ロケ誘致の三点にしぼって進め
ることを決定した。

この会場の雰囲気は東京、大阪、
福岡の元寇関係者に伝わり、銅像建
立に向けた動きが始まった。

事業の展開

平成十一年九月、芦辺町の有志三
人が準備会を組織し、数回の会合を
開催。これを受け十一月、大皿川恵
芦辺町長を委員長とする、元寇七百

「元寇の島元寇」「少式資時」ののほ
りを設置するなどPRに努めた。

イベント初日の十三年五月十九日
は元寇遺跡の供養、元寇遺跡めぐり、
ソドブジャムツイン・フレルバート
ル駐日モンゴル大使の講演など前夜
祭を開催。同大使は「モンゴルと日
本の友好親善交流には未来がある」
と述べた。またモンゴルの歌、踊り
のほか元寇太鼓の演奏があった。翌
二十日は元寇やぶ椿の記念植樹のほ
か、元寇高の生徒がふんする馬上の
少式公を先頭に、総勢百三十五人の
武者行列が元寇神社から芦辺港まで
練り歩いた。

このあと元寇出身で東京在住の彫
刻家小金丸幾久氏制作で芦辺港に建
立された少式資時銅像(高さ三・五
m)の除幕が行われた。少式公が現
れると一斉に大歓声に包まれた。

また、駐日モンゴル大使来島に当
たり、先のモンゴルの雪害被災に対し、
イベント期間中の支援活動で集まっ
た三十万八千七百九十四円の義援金
を記念式典当日、大皿川芦辺町長が

小金丸幾久氏の
少式資時公像



今後の取り組み

モンゴル大使に
手渡した。これに対
し六月十日、モンゴル大使館より元
岐各町に対し感謝状が届けられた。

この記念事業と大河ドラマの放映
もあり元寇を訪れる人は多くなっ
た。これを機に①モンゴル・元寇交
流元年と位置づけあらゆる展開を進
める②元寇資料の収集および展示施
設の整備③元寇遺跡の整備拡充など
——に着手する予定である。そして農・
漁業に観光を結びつけた島づくりを
島民一丸となって進めていきたい。

連携・交流プログラム 策定^{国土庁}調査

新しい全国総合開発計画では、「参加と連携」による国土づくり、地域づくりの推進を目指しています。そして、それには多様な地域や主体が、それぞれの個性や長所を生かしながら、互いに連携・交流を進めていくことが重要な課題となっています。

そこで、国土庁（現国土交通省）では、平成十一年度から二年にわたり、全国における連携・交流の取り組み状況について（地域活性化センターに委託して調査を実施し、地域における連携・交流のためのプログラムを策定しました。

この調査では、全国の事例から連携・交流にあたってのプロセス、ポイント、課題をタイプ別に分類して、取り組みを進めるためのプログラムを提示しています。これから広域的な交流・連携を図ろうとする地域は、取り組みの参考にしてください。

なお、「連携・交流プログラム策定調査報告書」については、国土交通省都市・地域整備局企画課から各都道府県の企画担当課へ配布されています。

この調査に関するお問い合わせは、（財）地域活性化センター振興部コンサルタント業務課までお願いします。

プログラム化した取組テーマと調査事例

1 流域連携

- 三遠南信地域交流ネットワーク会議（静岡県・長野県・愛知県）
- 北上川流域連携交流会（岩手県・宮城県）
- 四万十川財団（高知県）

2 地域資源の共同発信（サミット）

- 全国棚田（千枚田）連絡協議会
- 全国種類文化地域間交流推進協議会

3 都市農山漁村交流事業

- 東京都世田谷区・群馬県川場村
- 神奈川県川崎市・岩手県東和町
- 早稲田大学生協（東京都）・埼玉県神泉村

4 特産品開発 販売

- 三重県村づくり加工事業連絡協議会（三重県）
- 大分大山町農協（大分県）
- 株式会社四万十ドラマ（高知県）

5 観光ネットワーク開発

- 北の星座共和国（建国推進事務局（北海道）
- 瀬戸内しまなみ海道周辺地域振興協議会（広島県・愛媛県）
- 日本の心のふるさとを守り育てる飛越協議会（富山県・岐阜県）

6 産業振興提携

- TAMA産業活性化協議会（埼玉県・東京都・神奈川県）
- 離島フェア開催実行委員会（沖縄県）

7 U・J・ターン促進

- 十勝圏移住促進事業推進会議（北海道）
- ふるさと島根定住財団（島根県）

8 県際連携

- 中国山地県境市町村連絡協議会（岡山県・鳥取県・島根県・広島県）
- 三国サミット会議（栃木県・埼玉県・茨城県）

9 施設運営協力（公演の共同誘致）

- C・WAVEネットワーク協議会（大分県・宮城県・鹿児島県）
- シアターネットかんげき事務局（北海道）

10 遠隔医療

- 東北大学医学部附属病院・公立気仙沼総合病院他（宮城県）
- 医療法人鉄蕉会（亀田総合病院）（千葉県）

（参考）

- NPOによる主体間連携支援
- 三重県市民活動センター運営委員会・三重県生活部
- 北海道介護NPO連絡会

※上記のほかに18事例を例示 ※県名は、取り組み地域を表す

OPICS 全国初の「教育の日」を制定

青少年健全育成の啓発活動を



和歌山県貴志川町教育委員会生涯学習課係長
矢田 知大

教育制度に
ちなみ
6月3日に

貴志川町は、和歌山県の北部、那賀郡の西南に位置し、西

を和歌山市、東を桃山町にそれぞれ隣接しており、町の真ん中を流れる貴志川の兩岸に開けた町である。人口は二万一千人、面積二二・四九平方キロ。

また、本町は、気候は温暖で、水資源、美しい自然と豊かな文化財に恵まれており、いちごとホテルの町として観光行政に取り組んでいる。そして、貴志川町では六月三日を全国に先駆けて「貴志川 教育の日」と条例で制定した。

現在、少年犯罪の若年化、青少年をとりまく環境が厳しさを増していることから、学校・家庭・地域社会全体が二十一世紀を担う子供たちへの教育の重要性を再認識する機会として、六月三日を「教育の日」と条例で定めた。

六月三日と定めた理由は、日本の学校教育制度の基本である六・三制にちなんだもので、日本PTA全国協

議会が制定を提唱したことに加え、当町が全国で初めての制定である。

三日に行われた教育の日制定記念大会当日は、午前中のイベントとして①和歌山県選出の国会議員をはじめとする各種関係者を招いた式典②公民館講座でもある、きしがわ少年



当日のイベント キンボールの紹介

少女合唱団による発表会③町内各小中学校からの代表者による意見発表（六人が発表）④ニュースポーツ「キンボール」の紹介・講習会——を行った。

二コーススポーツ
キンボールを
お披露目

このニュースポーツ「キンボール」は直径百二十二センチ、約一キロの大きなボールを使い一チーム四人、三チームでビーチバレーに似た形でプレーする。子供からお年寄りまで幅広く楽しめるニュースポーツで今年から町を挙げて普及に取り組んでいきたい。

午後からは、逸見晴恵さんを講師に迎えて家庭教育講演会を開催。この中で逸見さんは、アナウンサーとして絶頂期で活躍中だった夫（逸見政孝氏）の突然のガン、闘病、死を乗り越え、子供たちとともに悩み苦しんだ生活を通して現在社会において最も大切なのは、家族の絆であると語った。

夜には、東映創立五十周年記念作品である映画「ホテル」を上映。

また、大会会場である貴志川町生

涯学習センターエントランスホールと展示コーナーでは町内小中学生が作った「貴志川 教育の日」啓発ポスターを展示した。

今後の取り組みについては、六月三日に学校で行事やイベントを行い、前後の日曜日に学校・家庭・地



逸見晴恵さんの家庭教育講演会

域全体で楽しめるイベントを開催し、学校関係者・保護者・地域の人びとみんなが一体となって青少年健全育成に取り組む姿勢や教育に対する啓発活動を積極的に推進する。さらに、十四年度以降に導入される「総合的な学習の時間」などを活用して、児童、生徒の意識向上を図っていく。

OPICS 体で自然を感じ、地球を考えよう

子供から大人も利用する環境学校

廃校の利用

上越市は「人・環境・まちづくり」を施策の基本方針とし、国際的な環境マネジメントシステムISO14001の認証取得を契機として、地球環境にやさしいまちづくりを進めている。

その一環として平成十一年七月に全国で初の「地球環境学校中ノ俣学習施設」を開校した。この学校は市の西部中山間地域に位置し、廃校になった中ノ俣小学校の有効活用を図り、地球環境の保全・改善を考える学習の場になっており、利用者は四千五百人を超えた。

宮越馨市長は「地球環境学校は恵まれた自然の中にあり、理想的な学習の場。環境問題解決の発信基地にしたい」とその狙いを話す。

利用者は小学生から大人までさまざまで、「上越にこんなに自然が豊かな所があるとは知らなかった」との声がよく聞かれる。

手つかずの自然をありのままに楽

しむことのできる地球環境学校では、さまざまな動植物の観察や星座観察、フィールドワークなど豊かな自然空間を生かした独自の体験（見る、聞く、さわる）を行うことができる。

また十二年八月には「こどもエコクラブ夏の全国交流会『サマーエコキャンプin上越』」の会場としても利用された。

アユも生息する清流中ノ俣川を舞台に繰り広げられたこのイベントは、全国の子供たちから大好評だった。同時に、川に入る機会をあまり持たない都会の子供たちは、アユやイワナ、ニジマスなどを解剖し、体内を観察して食物連鎖について学び、興味・関心を持ってもらった。

滞在型の施設

滞在型の学習施設である地球環境学校では、近くに宿泊施設を整備し、長期間にわたって、時を忘れてゆつくりと自然とたわむれることができる絶好の環境になっている。学習施設の受講料や宿泊施設の使用料など

は原則無料で、だれでも気軽に利用できる施設だ。

また、市内はもちろん全国からの利用も受け入れている。ただし、寝具や食事などを希望する場合は、実費負担。

さて、当校では地域の特色を生かした独自のプログラムを準備しており、そのいくつかを紹介したい。

「水生生物調査」では、実際に中ノ俣川の中に入り、アユやカジカを捕



「サマーエコキャンプin上越」での魚の解剖

って解剖するほか、水に住む小さな水生昆虫たち（カゲロウ・カワゲラの幼虫など）の捕獲・観察を通して、生命について考えるきっかけを与える。

「工作体験」では地元の間伐材などを使用した果箱づくりや植物のつるを使用したかこ細工、リースづくりなどが体験できる。モノを大切にすることを学び取ることができるほか、自分の手でモノができたときの喜びを感じることができる。自分で作ったものは世界にたった一つというオリジナル作品なので工作体験を終えた子供たちからは「こんなものができたよ、おもしろかった」といった喜びの声が聞かれる。一人ひとりの顔には生き生きとした笑顔と満足感があふれている。

「料理体験」では、中ノ俣で収穫したタケノコを用いてタケノコ汁をつくったり、そばを打ってみることができる。天気の良い日には広いグラウンドにかまどを置いて、まきを使って火をおこす。初めてマッチをす



新潟県上越市地球環境課係長
増田昌由



中ノ俣川での水生生物調査

る子供は、スギの葉に火をつけ、どのようにしてその火をまきに移すかが工夫のしどころだ。

飽食の時代といわれる昨今、私たちの食生活を顧みることにつながる。何といっても火を囲み、みんながつくった食べ物の味は一生忘れられない思い出となるだろう。みんなが食べる生き生きとした姿は、私たちスタッフにとっても忘れられない。

「星座観察」では、空気が大変きれいで澄んでいること、街の明かりが届かないおかげでたくさん星を見ることができると、さらに、望遠鏡を使うと星雲や星団などがよく観察でき、地球が動いている様子が分かる。また、土星の輪や木星の縞模様はとくに心に残るものとなるだろう。

盛りだくさんのメニュー

このほかにも、「地層観察」「紙すき体験」「炭焼き体験」「植物観察」「野鳥観察」「ネイチャーゲーム」「森の体験」「牧場体験」「草履づくり」など、多彩なプログラムをたくさん用意しており、皆さんにぜひ利用していただきたい。

地球環境学校を訪れた子供たちは異口同音に「楽しい、また来たい」

と言う。子供たちにとって、自然は見たこともない不思議さ、疑問や楽しさ、感動などを与えてくれたり、時には我慢することや生きることの厳しさを教えてくれたりする。まさに「生きた教室」なのだ。

自然の中で活動・体験することで、子供たちはより成長していくことができる。そして、子供たちだけではなく、大人も、自然は昔の思い出をよみがえらせてくれたり、感動を呼び起こしてくれる。中ノ俣には皆さんをワクワクさせるものがたくさんある。

都会の雑踏から一歩足を延ばしてみるとこんなに素晴らしい大自然が両手を広げて皆さんを待っている。ゆったりと流れる時間の中で、大自然に浸ってほしい。普段なら見過ごしてしまう動植物にも目を向け、風の声に耳を澄ましてみてはどうだろうか。この大自然に恵まれた学校で今のライフスタイルと自分自身を見直す絶好の機会が与えられ、何かを得て帰れることと確信している。

皆さんもこの中ノ俣でたっぷり自然のエネルギーを感じてみては。改めて全国の皆さんのお越しをスタッフ一同願っている。

森の妖精が住む町に 行政も積極的に対応

地域活性化センターとの
かかわり

八ヶ岳山麓を走り抜けるJR小海線。JR全線の中で最も標高が高い地域を通るこの路線のほぼ中央地点に位置するのが長野県小海町である。八ヶ岳連峰のふもとに松原湖高原という避暑地を抱え、豊かな自然環境を残している人口六千人の町である。

今回訪問した「こうみ塾」には、この小海町のことを真剣に考えている人たちが集まっている。小海町では平成六年度に「地域活性化センター」の助成事業である「地域づくりアドバイザー事業」を活用して地域づくりのための勉強会を行った。

勉強会自体はこの年だけで終了したが、これがきっかけとなって、その翌年に「こうみ塾」として新たに出発した。「小海町がこのままでいいのか、町を良くしていきたいと考えている人たちがせっかく集まったのだから何か続けていこう、という

意気込みがあった」と当時から事務局を務める古清水拓男さんは語る。

他の山間地域と同様、小海町でも過疎問題を抱えており「小海町のことを町全体で考えよう」とフオーラムを

企画、平成

七、八年度と二年続けて開催

した。このフオーラムではいくつかの提言が出て一定の成果は上がったのだが、この後、塾の活動は二年の空白期間ができてしまった。

「次に何をやるのかという方向性を見失いかけていた。それでも毎月の例会は欠かさず開催し、自分たちが小海町を知る勉強は続けていた。これが次のステップへとつながった」と座長を務める嶋田三代治さんは振り返る。

全国に放映された
フティリッツア

勉強会や例会を重ねていく中で、ある物語が飛び出してきた。東京か

かい心を持つ人びとが住む小海町なら森の小人が住んでいるかもしれない」という考えが自然に広がった。そして「森の小人が住む小海町」というコンセプト、夢のあるまちづくりのための方向性が出てきたのである。

「フティリッツア」と



らのイターナー者であるメンバーの一人が「森の中で小人を見たことがある」という話をした。この小人とはヨーロッパで「ノーム」と呼ばれる森の妖精のこと。

初めは半信半疑だった他のメンバーも、ノームに関する資料を読むうちに「豊かな自然が残り、素朴で温

は森の小人・ノーム自身のこと。ノーム語でこう呼ぶのだそう

うだ。平成十二年には塾内でイメージを練り上げ、メンバーの一人であるデザイナーがイラストを描き、ロゴマークの商標

Pyritza

登録を行った。そして、できることから始めることとなった。

塾での具体的な活動としては、このキャラクターをプリントしたTシャツの製作・販売、交通安全ステッカーの新小学一年生への配布、ハイビジョンによるビデオ作品の製作などを行ってきた。

このハイビジョン作品は小海町高原美術館のハイビジョン番組制作機材を活用し、メンバーの手作りによるものだ。プティリッツアと小海町の不思議なつながりを紹介した約十分のこの作品は十二年度に岐阜県で開催



全国ハイビジョン手づくりソフトフェスタ2000で優秀賞を受賞

された第八回全国手づくりソフトコンクールで優秀賞を受賞し、ハイビジョン放送で全国放映もされた。

町中いたる所で 広がりをも

小海町の駅を降り駅前商店街の入り口に立つと、街灯の下にプティリッツアの旗が並んでいるのが見える。また、プティリッツアのタイルをはめ込んだ小道もある。これらは商工会がイメージキャラクターとして取り入れているもの。

また、行政も町指定のゴミ袋のデザインに取り入れたり、町勢要覧やホームページで紹介している。

観光関連でも国道沿いに立つ看板や松原湖畔の遊歩道案内に取り入れており、町中でプティリッツアを見ることができ。こうみ塾で取り上げたことがきっかけとなって、町の中に自然に広がってきているのだという。

事務局担当は役場職員であるが、パン店経営者などの事業者、民宿ベインション経営者、農業従事者、デザイナー、建設業、美術館職員など、こうみ塾のメンバーの職業は実にさ

まざまだ。何かを立ち上げようとすると、それぞれ分担できる分野が違うからすぐにことが進んでいくのだという。

小海町でのプティリッツアは、塾のメンバーがそれぞれの職場や所属する商工会・観光関連団体などで話をしていくことで町内に広がっていった。

塾のメンバーで観光青年団団長でもある鷹野久里雄さんは「さまざまな人が集まるこうみ塾での交流で刺激を受け、自分のフィールドでも何か動いてみようというきっかけになっている」と語ってくれた。

町内の他団体や近隣市町村の団体との交流を通して、小海町のことを考え、自分たちのできることから行動するという形が浸透してきている。取材にうかがった日も「小海町イーターズの会」との交流会を開催、メンバーたちは町の外から見た小海町についての意見を聞き、熱く語り合っていた。

町への 政策提言も

現在、こうみ塾としては大きなイ

ベントなどは行っていない。町内にプティリッツアが浸透してきており、「そろそろプティリッツア関連で何かやりたい」という雰囲気が高まりつつある。こうみ塾では「まず自分たちが楽しむ」という基本を大切にしながらアイデアを出し合っている、イベントなどの次のステップへとつなげたいと考えている。

また、小海町にはプティリッツアに限らず、まだまだ魅力がある。嶋田さんは今後の活動について「この町をより素敵な町にするために、今後は町への政策提言・提案を行うことも考えていきたい」と話してくれた。

小海町を愛する人々たちによる「プティリッツアが住む町」という夢のあるまちづくりはまだ始まったばかりである。

(地域活性化センター情報サービス課
副参事 五味ひとみ)



街灯に下げられたプティリッツアの旗

こうみ塾
プティリッツア

●設立年 平成七年四月 ●設立・運営主体 自主組織
●代表者 嶋田三三治 ●会員数 三十人(男二十四人、女六人)
●事務局連絡先 古清水拓男
〒三八四一 一〇三 長野県南佐久郡小海町豊里五九一 八一二 社団法人小海町開発公社 ☎〇二六七 九三一 二五三九

成功した夏祭りイベント 何よりも大切な 人と人のふれあい

公園木、
高野槇の群生地

六日市町は、島根県の西部に位置

し山口県に接している。古くから山陰山陽の交通要衝の地で物々交換の市（毎月六日と七日）が開かれる町として発達し、藩政時代は宿場町として栄えたところである。また、ダムのない川で知られる一級河川高津川はこの町の大蛇ヶ池にその源を発し、町内を横断する形で流れ、流路八一・一キロをかけて日本海に注いでいる。一級河川の水源が特定できるのは全国でも珍しい。人口は約六千人、面積は約二百平方キロでその九一％を山林が占めている。

四季折々に彩る豊かな自然環境に

恵まれたこの町には、世界三大公園木の一つ高野槇が約五十鈴にわたり群生している。本州の南限として学術的にも貴重なもので、島根県環境保全地域に指定されている。その高野槇

自生林と研修施設コウヤマキギャラリーを中心に、恵まれた自然を生かし、六日市町ならではの独特なものをつくっていきたく活動してい

る団体「たんぽぽの会」を訪ねた。
踏まれても、
叩かれてもくじけず



高野槇自生林自然観察会

この会のメンバーは十八人。すべて女性である。発足は、今から十一年前の平成二年のこと。当時、地区の集いでソフトボール大会が開催されていたが、一年に一回会うだけでは気がしれないと、月に一回ぐらい会っておしゃべりをし、心のつながりができたらということでお茶会を始めたのがきっかけだった。

なぜ「たんぽぽ」の会なのかと槇田祥恵会長に尋ねると「この会のモットー。踏まれても、たたかれてもくじけないこと。そして仲間の輪を広げていくことを目標にして活動している」との返事。

主な活動内容は、毎年夏に開催される高野槇自生林自然観察会の参加



コウヤマキギャラリーの前で（前列左が槇田さん）

者への昼食の準備や産業祭への出展。心のこもった山岳むすびと豚汁は参加者に好評で、常連客がいるほどとか。

また、「つる」を用いて、かごなどを作る教室も開催している。

さらに、この活動の拠点施設「コウヤマキギャラリー」周辺の花壇を整備し、住民やそこを訪れる人の心を和ませている。

これまでに最も成功したイベントは、「真夏の夜の夢」という夏祭り。三百人以上の人びとが集まり、笑顔と笑顔が飛び交ったという。

活動費は？

「山岳むすびや豚汁、かご、リースの販売利益で賄っているが、ほとんどが飲み会でなくなってしまう。お金がなければならにできることを見つけて活動している。何より人と人とのふれあい大切なのだから」と。

口コミによる 広がり

これらの活動で徐々に地域が活気づいてきたという。リースやかごを作りたいという人が口コミにより増えてきた。材料となるつるを採ってきてくださる方がたくさんでき、仲間意識が芽生えてきた。

また、町内の行事には夫婦での参

ギャラリー周辺の花壇整備



加が増え、行事そのものの盛り上げに大きく貢献している。行事の主催者にとってもかけがえのない存在のようである。

ただ現在気掛かりなのは、勤め人の参加が難しく参加者が限られてきたことで、これに対し会長の植田さんは、「とにかくコンタクトを取っていくこと。無理をせず、楽しんで参

加できる環境づくりに努めている」とのこと。

また、つるを保管する場所がないことや、作業をする場所が手狭であることなどがあがるが、少しでも多くの方にこの会の活動を認めてもらい協力を得られるよう絶えず努力をしている。まさに「踏まれても、たたくられても……」である。

植田会長の 人柄について

で、会員の方々にお話をうかがった。

「明るくて行動力があり、相手とはケンカをしながらも心を割って対話する人。とにかく何を

するにも一生懸命取り組み、また一方で「ほか」と抜けたところがあり、細かいことは気にしない人」と憎めない一

面も……。しかし、そこはこの会の良いところで「植田さんが行き届かないところについては、次にカバーする人がいて、植田さんもその人に任せてくれるからうまくいく」と信頼関係も絶大である。

人は生かされたものに 感動する

植田会長に今後の展望をおうかが

した。「町には温泉施設もでき、中国自動車道を生かして他県からも多くの人が出入りするようになり、交流の場としては最高の場になる気がする。でも、忘れてはならないことは、人はつくられたものには感動しない。生かされたものに感動する、ということ。自然を大切に、六日市町に合った独自のものをつくり出していきたくと考えている」

筆者が、六日市町を訪れて感じたことは、この町には「出会い・ふれあい」や「人の心」「人の情」が生き続けていること。これこそが、自然や文化に負けないくらい貴重な財産なのだと思う。自然や文化とともにいつまでも守り続けて欲しいと願っている。

（助地域活性化センター業務第二課
副参事 畑尻広昌）

TOPICS 全国でも珍しいスケボー施設

議会での請願採択がきっかけ



片岡正臣 高知市スポーツ振興課長

空いて練習できる場の提供

高知市は、若者に人気のあるスケートボード、インラインスケートができる施設として、大原町の市総合運動場内に全国でも珍しいスケートボード場を建設、市民に利用してもらっている。

これは中・高校生を中心とした若者が公道や市内の公園、駐車場でスケートボード遊びをして通行の邪魔になったり、危険なことから安心して練習する場所を建設してほしいとの請願が市議会に出され、採択されたことがきっかけだ。

教育委員会では、スケートボードがかなりの音を伴うことや、愛好者が中・高校生中心のため交通の便のよい所、またある一定の広さも必要なことなどを考慮し、適地を検討してきたが、必要な諸条件をクリアできる場所の確保がなかなかできず建設計画が進まなかった。

また、世間一般にはスケートボードの愛好者は、茶髪でルールを無視する者が多く、非行の溜まり場とな

るといった意見もあり建設場所に苦慮した。高知市では平成十四年のよさこい国体開催に向けて高知市総合運動場の第二期整備を進めており、多目的ドーム相撲場に隣接した空き地にスケートボード場を建設した。

愛好者の意見聞き設計

建設費は約五百万円、円で請願者や愛好者などの意見を聞き設計した。広さは二百八十平方メートル。高さ六十センチから一・八メートルの斜面を三カ所配置し、滑りの連続性を考慮した造りになっている。

回転とジャンプを競う「ストリート型」で、クォーターパイプ、フラットベンチやピラミッドを効率的に配置し、初心者から上級者まで利用できるようにした。

利用にあたっての安全対策としてはヘルメットの着用を義務づけた。まただれでも自由に利用できるため総合運動場管理事務所では施設と共にモニターによる集中管理を行っている。

利用時間は午前九時から午後九時



までとし年末年始以外は休みはなく、使用料は無料。利用者からは「初心者には少し難度が高い」との声も聞かれるが、「以前のように周囲に気を遣う必要がなくなった」と好評のようだ。土・日曜日には三十人ぐらいが利用している。

市民の苦情は減りつつあるが、依然として中心部の繁華街でのストリートスケボーラーは後を絶たない。今後のPRや口コミでますます利用

者が増えるのではと期待している。今後、競技スポーツとしてのスケートボード人口の拡大や、気の合う仲間同士から全市的な組織づくり、初心者への指導、インラインスケート、BMX（バイシクル・モトクロス）との調整など、利用者が主体となった管理運営を目指していきたい。近い将来、この施設で大会が開催されるよう請願者、利用者の活動をフォローしていきたい。



地域だより

環境学習施設がオープン 福井県武生市

武生市は、良好な環境の保全、創造に資する担い手を育成する学習の拠点として「エコビレッジ交流センター」を開設した。

本造二階建て、床面積は約六百平方メートル。

環境に関するビデオを上映したり、講演会、エコ商品を紹介する里山ギャラリー、星座観察のできる展望塔、料理研究室などがある。内装や設備は地場産の木材を使用したほか、太陽光発電で省エネにも配慮、環境にやさしい施設になっている。

山菜採り、ホタルやモリアオガエル観察などのカリキュラムのほか親子での環境調査、エコシテイ講座もある。

太秦に「ふれあい文化会館」 京都市

京都市が右京区太秦に建設していた「ふれあい文化会館」が完成、九月十七日にオープンする。日本映画発祥の地にちなみ、映画フィルムを模した円形のユニークなもの。鉄筋コンクリート造り四階建て、総面積は約四千三百平方メートル。総工費約二十五億円。

舞台付きホール（客席四百五十二席。うち、車いす用四席）、演劇、ダンスの練習などができる創造活動室、四つの会議室、乳幼児のための保育休養室などがある。なおオープン記念として、映画各社から器材などを借りて特別展示を行う。

観光語り部を育成 鹿児島市

鹿児島市は、同市の歴史や文化などを観光客に説明する「観光語り部」のボランティアを育成している。

現在九十二人がおり、女性は四、五十代、男性は六、七十代の退職者が中心で、中には元個人タクシーの運転手

していた八十歳の高齢者もいる。九月末まで計十五回、一回当たり約二時間、市役所の職員などが講師となり研修を行っている。十月から「城山展望所」（西郷隆盛自害の地）など多くの観光客が訪れる場所を中心に数カ所で土、日、祝日に行う。

和紙伝承館がオープン 福井県安達町

安達町は、古い歴史を持つ同町特産の手すき和紙「上川崎和紙」の伝統を継承するため、「和紙伝承館」をこのほどオープンさせた。

上川崎和紙は一千年以上も



前からつくられ、平安時代には「みちのく紙」と呼ばれていた。源氏物語や枕草子にもその名が登場し、最盛期の昭和初期には約三百戸の農家が和紙づくりに従事した。障子紙用がほとんどだが、需要減とつくるのに手間がかかることから現在ではわずか三軒の農家だけ。

伝承館の入館料は無料だがメニューごとの料金を払えば紙すき、うちわ、人形、草履づくりも体験できる。珍しいせいか県外からの利用者も多い。本造平屋建て約四百二十平方メートルで、建設費は約一億三千百万円。

外国人市民施策懇談会を 設置―広島市

広島市は、外国人市民の市政参加を推進するため、市内に居住する外国人で組織する「外国人市民施策懇談会」を設置した。

同懇談会は外国人市民十二人で構成。国籍は韓国、中国、ブラジル、英米など。同市には昨年末現在で一万三千九百三十人の外国人登録者がお

り、これまで①外国人に対する十分な情報提供②民族学校への助成③福祉施策の充実などを求める要望が市に出されてきた。

同懇談会は、今年度は外国人市民の生活実態調査を行い、十六年度に策定する「外国人市民施策基本指針」に反映させる方針だ。

国内最大級のハーブ庭園 北海道由仁町

ハーブを主体とした庭園としては国内最大級の「ゆにガーデン」がこのほど、由仁町にオープンした。

由仁町がロンドン市内と風土が似ていることから、英国風ガーデンにした。広さは十四畝と東京ドーム十一個分。タイム、レモンバーム、ミントなどハーブ約二百三十種類が植えてある。白い草花、バラなど九つのテーマに分けられており、温室もある。入園料は中学生以上八百円、小学生三百円で、土、日などの入園者が多いときはハーブに詳しい園長自らガイド役を務めている。



決算・補正予算案など可決 理事・評議員会

財地地域活性化センターは六月八日、東京都千代田区平河町の全国都市会館で第六十一回理事会および第三十八回評議員会を開き、平成十二年度の事業報告、収支決算、十三年度収支予算の補正などを提案。理事会、評議員会はこれらをいずれも原案どおり可決した。

収支決算は収入十四億九千五百九十九万四千三百七十七円、支出十二億二千七百七十五万九千三百三十二円、次期繰り越し二億七千四百二十三万五千二百四十五円。

事業報告は、①インターネットホームページ「地域づくり百科」の充実に引き続き努めた②新規に「ふるさと体験

事例集2001」と「ユーザーインターインターガイドブック2001」を作成した③全国各地域リーダー養成塾修了者への支援として、ホームページ「地域づくり百科」内に新たに専用の電子掲示板を設置した④二〇〇二年の日韓国

笑顔がいちばん！ 放送予定

●8月5日
山梨県石和町、小淵沢町
ワインの里

●8月12日
世界陸上競技大会中継のため
「笑顔がいちばん！」は休み

●8月19日
山口県阿知須町、秋穂町
きらら博山口

●8月26日
福島県須賀川市、塙町
うつくしま未来博

●9月1日
兵庫県神崎町、城崎町
歴史文化再発見

TBS系、毎週日曜日
午前7時～午前7時30分
※一部で放送時間が異なる地域があります。

民交流年に向けて、日韓地域づくりリーダー交流事業として韓国の地域リーダーなど五十四人を日本に招致した⑤ふるさと情報プラザにおいて、毎月開催する「ふるさとを語る集い」を新たに開始した⑥「わくわくWORK」やEメ

ールマガジンの一般提供で、地域で必要とする人材の確保を支援する「地域人材確保システム」の新たな構築などが主な内容である。

また、十二年度収支決算に基づき、十三年度収支予算を補正し、補正後の予算を十五億二千四百五十万三千円とした。

首長来訪

▼群馬県赤堀町 金井昇町長
(6月6日)

▼香川県宇多津町 米澤正文町長 (6月29日)

お知らせ 地域産品・ 観光おこし研修会

財地地域活性化センターと財日本観光協会は、今年も共催で「地域産品・観光おこし研修会」を開催します。

この研修会は、地域の人びとが自らの地域の有形・無形の資源や特性を把握し、新たな観光地や地域特産品として顕在化させていくための着眼点や手法などを、講演やグループ演習などを通じて習得していただくことを目的としています。

各地で、物産・観光振興に携わっておられる方々の積極的な参加をお待ちしております。

●日程・会場(今年は、次の2会場で開催します)

北海道会場：平成13年10月4日(木)～5日(金)札幌市／札幌プリンスホテル

九州会場：平成13年11月8日(木)～9日(金)福岡市／ソラリア西鉄ホテル

●研修内容

講演「21世紀型の新しい観光の潮流はこれだ！」

講師：小林英俊氏(財団法人日本交通公社観光マーケティング部長)

グループ演習「地域特産品が観光を変える」

講師：須川一幸氏(株式会社地域振興研究所代表取締役)

北海道会場では「北海道虻田郡虻田町」を、九州会場では「熊本県阿蘇郡白木村」をそれぞれ事例地として設定し、その地域の物産・観光振興の方法についてグループ演習をしていただきます。

●募集人員 各会場100人(先着順)

●申込期限

北海道会場：平成13年9月7日(金)

九州会場：平成13年10月12日(金)

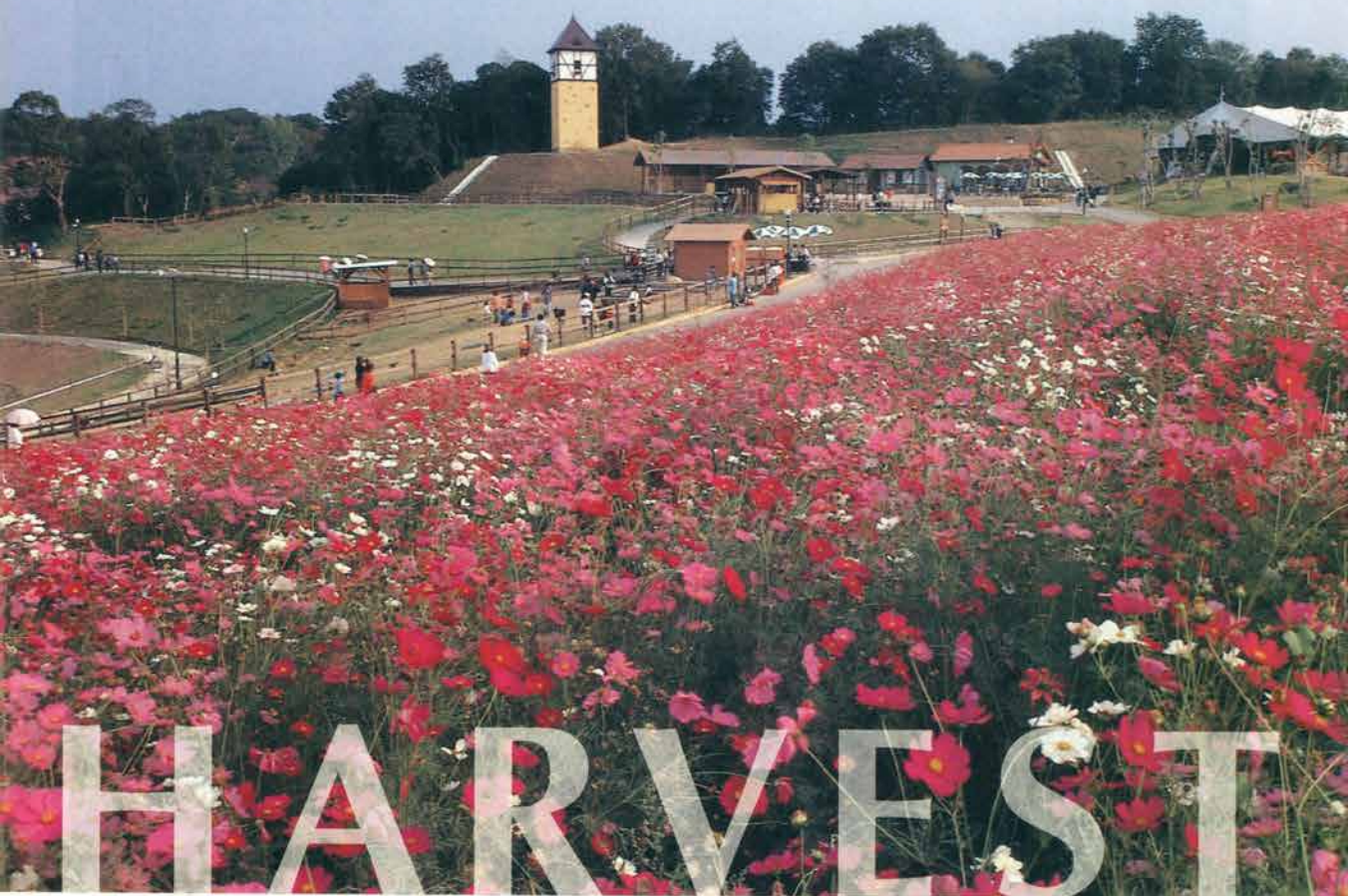
●参加費用 7,000円(研修費、昼食代および交流会費)

お問い合わせ先 財地地域活性化センター業務第2課 担当：畑尻・大野
TEL03-5202-6137

shin 信州

二百余の湯の郷

信州



HARVEST

ハーベスの丘

手前みそ
ですが…

③大阪府堺市

堺・緑のミュージアム「ハーベスの丘」は、平成十二年四月に堺市南部丘陵地域に開園した「新鮮・安全・美味しい農産物のあふれる収穫祭の村」をテーマにした体験型農業公園です。

都市住民に堺市南部の豊かな自然環境や農業文化にふれる機会を提供するとともに、農産物の生産、加工、流通を一体化させた都市型農業の展開を目指しています。園内には、四季折々の花が咲き乱れ、季節のうつろいを感じられるだけでなく、羊や馬や小動物たちが訪れる人を出迎えてくれます。

ゲート前には農産物直売所をはじめ、園内で製造されたソーセージや乳製品を販売する手づくり館があります。園

内に入ると緑の樹林地を結ぶつり橋や小川のせせらぎが心を休ませ、地元の食材を使ったおいしい料理やバーベキューを楽しめます。さらにパ



ン・ソーセージづくり教室から本格的な登り窯を使った陶芸教室、つる籠編みなどのクラフト教室など多くの体験メニューを取り揃えています。

EVENT CORNER

6月18日～22日
土浦市（茨城県）
土浦市観光と物産展③

6月25日～28日
徳島県
徳島県観光物産展「いやしのくに四国徳島へおいでなして」

8月のイベント予定

★日本橋プラザビル
イベントスペース

8月20日
関城町（茨城県）

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

8月6日～10日
石岡市（茨城県）



6月実施イベント

★日本橋プラザビル
イベントスペース

6月6日
赤堀町（群馬県）
青果物販売促進キャンペーン①

6月7日～8日
飯山市（長野県）
北信州飯山ふるさとキャンペーン②

6月13日～14日
小田原市（神奈川県）
小田原を味わう2日間

6月26日～27日
東根市（山形県）
ひがしねさくらんぼ祭り

★ふるさと情報プラザ
イベントスペース

6月4日～8日
中国五県物産観光協議会（鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県）
中国五県観光展

6月11日～15日
美山町（京都府）
美しい美山の景観写真コンテスト
入選作品展示会

編集後記

▼今回は「日本の中の外国」を特集テーマに取り上げた。

国際化という時代の流れを受け、姉妹都市を提携しているのは四月現在で千四百七件に上っている。調べてみると、大半が当初の目的に沿った活動を行っているが、中には「隣の町がやっているの」「最近、マンネリ化してきた」との声が聞かれた。事例や中グラビアで紹介したように、官民一体となって「外国」を生かしたまちづくりを行っている自治体もある。今後の参考にされては。

▼参院選も終わり、これから来年度予算編成作業が本格化していく。

「聖域なき構造改革」を掲げる小泉政権下では、従来と違った手法が取られるのは必至だ。地方交付税や道路特定財源の見直しも含まれており、その行方は地方自治体にとって大きな関心事であろう。われわれ住民が行政に望むのは「住んでよかったといえるまちづくり」だ。年末のように決着するか見守っていきたい。（やなぎ）

●編集後記

特集Ⅱ 生活文化・衣の発信

地域づくり8月号

平成13年8月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター
東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiki-dukuri-hyakka.or.jp/>

印刷＝大日本印刷株式会社

どんな夢をねらおうか。



ジャンボにロトにインスタントくじに、うれしい夢いっぱいの宝くじです。



二科展デザイン部 入選作品
萩野 淳

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。



日本宝くじ協会

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

本誌は財日本宝くじ協会の助成を受けて刊行しています。